

---

notopic

GGG

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

notopic

### 【NNコード】

N5434E

### 【作者名】

GGG

### 【あらすじ】

ideaにより万物の方程式すべてを垣間見ることが出来る僕にとって、情報は他人だけではなく世界が与えているということに気がついた。否、情報とは二次創作物。眞実の情報とは世界がすでに持っているもの。僕に逃げ場はなくなつた。世界は常に情報を排出する。世界は僕に常に干渉する。世界は僕を蔑にする。世界が僕を蔑ろにする。僕は、眞実という圧倒的な存在を知つた。これは僕に対する世界が与えた強烈な罰だった。これで僕は、とうとう見たくないものを直視することになってしまった。僕は 、僕は

、僕は 、僕は、僕で、僕が、僕を、僕自身が、世界を見せつける、敵だ。

notopic 前篇（前書き）

概念的で中一病万歳な作品です。

ある日の出来事。

それは、唐突な出来事だった。

概念的。常にまとわりつく。物質の裏側、または本質にあるideaが僕を支配する。だから、理解が追い付かないほどに理解した。

自分がどんなにみじめな存在なのか、僕ははつきりと理解した。世界の方程式が、僕という個体を生かしている。僕という個体は、世界規模で比べると取るに足らないのに、主観である僕は、そんな世界に抗いたいと思っている。主観、は、僕、は、自分という名の摂理から反している癖に、世界に抗いたいと思っている。

他人 ではなく、世界に。

それは、愚かしい行為そのものだった。でもその世界とは、他人が支配するものだと、僕は知っていた。他人という人だけが、言葉という情報をくれる。今までそれだけだった。でも今は違う。

ideaにより万物の方程式すべてを垣間見ることが出来る僕にとって、情報は他人だけではなく世界が与えているということに気がついた。否、情報とは一次創作物。真実の情報とは世界がすでに持っているもの。

僕に逃げ場はなくなった。世界は常に情報を排出する。世界は僕に常に干渉する。世界は僕を蔑にする。世界が僕を蔑ろにする。僕は、真実という圧倒的な存在を知った。

これは僕に対する世界が与えた強烈な罰だった。

これで僕は、とうとう見たくないものを直視することになってしまった。

僕は 、僕は 、僕は 、僕は、僕が、僕を、

僕自身が、世界を見せつける、敵だ。

やがて眼が覚めた最初の夜。辺りは昏々としていて、否、自分が昏々としているからだろうか、夢と言ひ名の混沌が現実と入り混じり、そこは不思議な幻想世界を作り出していた。または、それこそが真実なのか……。

夢現……という訳ではなさそうだ。自分としてはこの上無いほど視界がはつきりとしている。しかしそこに意識は無い。こういう状態のときは決まって金縛りになるものだが、そうではないようだ。第一、金縛りの時に見える目の中側から見える血の塊、もやもやがないし。

ああ、まあそんなことは兎角どうでも良いか。

取りあえず、喉が渴いていた。自分は飲み物を求めて体を起こそうとする。が、動かない。右手、左手 不可。上半身、下半身、大まかな部位も動こうともしない。指先を動かそうと試みる。そうしたら、人差し指がぴくりと立ち上がり、続いて別の部位も動くようになった。上半身を再度動かそうと試みて、そこで自分は気がついた。

ここはどこだ？

見知らぬ天井、見知らぬ雰囲気、匂い、それらは夜が見せる瞬きの間の幻想。よくよく考えてみたら、思い当たる場所であった。むしろ気がつかないのは可笑しかった。おかしくておかしくて笑える。なんだここは学校じゃないか。自分は自分のクラスの教室に横たわり、冷たくて固い床の上で体をガチガチに固ませていた。

そこまで認識出来る程度に回復すると、今度は意識が完璧に覚醒した。

「何で僕はここに居るんだ？」「……

……思い出せない。何か大事なことを忘れているような気がする。そこまで考えて絶望した。

自分は、誰なのだろうか ?

名前。

生まれ。

出身。

住所。

家族構成。それら全てが曖昧で、霧がかっていて、ああ、うん、つまり、だ……。記憶喪失ってやつだろう。

なのに、自覚できる自分の学校。

……右手の甲を額に乗せる。そして溜息を一つ。

「まあ、良いか。警察に行けば何かわかるかも知れないし……」「どうやら思ったより自分は大丈夫そうだった。

学校から出てすぐのことだった。 弱った。地理が全く解らない。自分の脳内で確認出来たのは、自分の学校のみ、だった。つまり、だ。僕の拠点となるのは学校であり、情報を集めるには学校を拠点にするしかなかつたのだ。

場合によっては、学校で寝泊まりするのもありだな、とそう思い始めた自分がいた。そんなこんなで迷つている自分が居るのはどこかの路地。夜つて所為もあって、全く視界が利かないのが残念な結果をさらに呼び寄せている。学校を飛び出してから約三十分経つていてると思う。学校で確認した時刻が確か深夜二時位。学生としてはあまりよろしくない時刻に歩いていることになる。いつそ補導されたなら良いのに、世の中はいつも上手くいかない。

そして、たつた三十分で僕は嫌気がさし、探索するのをやめにすることにした。第一、こんな状態になる理由が解らないし、一体何がどうなつていてるのやら、さっぱり理解が追いついていなかつた。

「朝になれば、誰かしらに会えるだろうし、多少の騒ぎにはなるだろしつけれど、まあそれ以外ないよな。 それに、朝の方が周りも見やすいだろうし……」

あまり苦労しない疑問だった。自分を分析すると、結構突拍子も

ない感性の持ち主であり、多少の事ではどうじない、またはどうじられない性格の持ち主であるといふことだけ痛感した。

そして、結局その日は、学校に泊まる」とこしたのだ。

。

「三木谷君、どうしたの？」

その日かけられた第一声は、そんな声だった。いや、正確には良く解らない。寝ていた間にも、声を掛けられていたかも知れないだろうし、未だ自分の意識は朦朧としていたし、認識出来たと言つ意味の第一声では、確かな声だった。

「三木谷って 僕？」

「本当どうしたの？ 床に寝そべって。ああまさか頭打つて氣絶してたとか？」

笑いながら明るく話すショートカットの女。彼女には悪いが、記憶外の人間であった。でも、お蔭でわかつたことがある。どうやら僕の名前、または苗字は三木谷であるということだ。ニコアンス的にそれは苗字なのだろう。

……しかし彼女の言つまさかは、怖氣がする程真実味を含んでいうで怖い。

「ああ、いや、うん。実は僕記憶喪失になつたみたいで……」

そう言つと彼女は間抜けな顔をした。

「なんの冗談？ まじで頭打つたんじゃない？」

「かもしれない。 てか、自分家どこにあるか思い出せなくて、帰るに帰れなかつたんだよねー」

何故だろう……。自分としては眞実を至極当然のよう話しているのに、眞実味を全く帶びてこない。

「ははは、まあ無茶振りしたのは私だけじゃ、あんま面白くない冗談は止めようぜ？」

彼女のする乾いた笑いは、ただただ不快なだけだった。

「いや、本当なんだつてば……」

「ああ、はいはい、解つたから、大人しく席に着いてな」

投げやりに返答される。

どうやら、全く信用されてないらしい。少し、憤慨である。最後に一つ、彼女に聞いた。僕の席はどこですか、と。そしたらめんどくさそうに、ショートカットの彼女はそこ、と廊下側の一番端の席を指差したのであった。

兎に角その日は不思議な一日だつた。徐々に集まりつつある人。挨拶を交わす人と人。クラスに集まるんだから、やはりそれはクラスメイトであつて、小さくも絆というものがあるのであろう。僕を除いて。その内の何人かは、絆なんてものを忘れた僕に対し、挨拶をしてくれた。少なからず次いでに名前をそこにプラスする人もいた。

だから自分の名前が解つた。三木谷 真弥 どうやらそれが僕の名前らしい。まあ、解つたところで自覚のない自分には、他人の名前であることには違ひなかつたし、違和感は拭えなかつたけれど……。

「真弥、おはよう」

そう、一人の少年が話しかける。少年、と言つていい年ごろのかは微妙だが。それもその筈で、この学校は義務教育ではない高校で、僕達は高校の三年生なのだから。

「ああ、おはよう」

少年に挨拶を返す。よくよく見ると、少年は童顔であつた。ストレートでさらさらした髪質は、女性を思わす程だつた。眉毛の上でキチンと整えられた髪の毛。後の方も小さつぱりしている。この人に関して言えば、少年と言つ言葉の方が似合つていた。容姿も悪くない。身長がやや低いが、雰囲気とあつてゐるから特に問題はないだろう。はて、この少年にとつて、僕とはどういふ存在なのだろうか。

「えつと、僕に何か用かな?」

思わずそう聞いてしまつたが、それはおそらく愚問。本来なら雑

談でもすべきといひなのだらう。

ああ要するにだ、この少年

と僕は、友達、らしい。

「用つてほどでもないけど

なんか、雰囲気違つね。疲れてる

？」

「……ん、ああそつかも。だつて教室で寝泊まりする羽田になつた  
くらいだし」

「それ本当？ 部活の関係でそつなつたの？ つて、帰宅部だつた  
ね真弥は」

「……そつか、僕は帰宅部なのか。

それは兎も角としてどうやら彼と僕とはなかなかの良い仲らしい。  
それなら、色々聞いても憚られないだらう。

「実は僕、記憶があやふやなんだ」

そういうと彼は眼を丸くした。

「いやに唐突だねえ……。何かあつたの？」

「言葉通りさ。なんていうか、記憶喪失らしくて、部分健忘つてや  
つ？ 自分に関することがまつたく思い出せないんだ……」

「難しい言葉だね。でもそれじゃ君は何で学校に居るんだい？ 病  
院とか行つた方が良いんじやない？」

「こやかに笑いながら言つ。でも言つてることはもつともらしい  
ことであつた。

「誰も異常に気が付いてくれないんだ。自分がどうこうやつつか判ら  
ないから迂闊に誰かに話しかける訳にもいかないしさ……。実は学  
校以外の場所すら覚えてないんだ」

そこまで言つて、沈黙が流れる。

「 ちょっと待つて、君、本当に記憶喪失なの？」

少年の顔色が変わつた。真実味が帶びてきたのだろう。

「じゃあえつと、僕の名前は解る？」

「解つてたら自分から挨拶してくるよ」

「えつと、本当に解らないの？！」

「だから、初めからそうだつて。記憶喪失って言つただろ？」

「でも、君、すごく自然だよ……」「

「おどおどしてもしょうがないし」

「た、大変だ……」

「そう、すごく大変なことになつてしまつた様だよ  
そういうと、今度はジド田をして彼はこう言つた。

「君、僕をからかつてない？ もうちょっと焦るのがやつぱり普通  
だよ！」「

「からかつてないんだつてば……。自分が解らないから学校に泊  
まる羽目になつたんだ。昨日何をしていたのかすら思い出せないよ  
」「本当なの……？」君、昨日は普通に学校通つてたし、普通に生

活してたよ？ それなのに急に記憶喪失つて、何さ。本当に記憶喪  
失なの？」

「物事は常に唐突なの。自分だつて好きで記憶喪失なんでものにな  
つたんじゃないんだからさ」「

そこまで言つと、彼の表情も面白いように変わつていつた。顔に  
滲み出でこむ信じられませんという文字は、多少だが俺を落胆させ  
た。

「僕の名前、佐藤和彦さとう かずひこだけ、覚えてないの？」

「聞き覚えもないよ。悪いけど

「そつか……、つまらない冗談はよしてよね」

その一言を聞いた瞬間、少し頭がカツと熱くなつた。自分としては  
は本当の事を言つただけ、それだけなのになぜこんなに否定されな  
くてはいけないのか……。

だん、と机に拳をぶつけていきり立つ。そして椅子をけつ飛ばし  
立ち上がつた。

「本当だつて言つてんだろ？！

うわつ、と驚く彼。そして注目する周り。次第にそれはほおつて  
おくと、ざわざわとしまじめた。

「真弥……？」

「もういい

それ以降、俺は誰とも喋ること無く、学校を出て行くのであった。

見回す町に見覚えはなく、道、家、道、家の繰り返しにも飽き飽きした頃、俺はやつと迷ってしまったという事実に気が付いてしまつた。当たり前と言えば当たり前。無謀と言えば、明らかに無謀だつた。

何も知らないままに走り出した。そんな青春のままじとじやあるまいし。

「僕は、どうなつてしまふのだろうか。

不安、は徐々に具現化して現実味を帯びてくる。今までなかつた緊張感は、唯一知つていた学校という場を離れる」とにより、いつきにあふれ出てきた。 口の中は次第に乾き、器官には喉を潤すツバは一切入らず、横暴なことにそこには空氣のみがどくどくと入つていくのであつた。

それに、げほげほ、とむせかえる。

「はあ……」

溜息を一つ。……、いや、ひとつじや全然足りないかもしれないとにかく、歩きつめることにした。そうすれば、何かしら解るかもしれない。否、解らなくては困るのだ。さつき、所持品を確認したところ、財布などの持ち物は一切なく、身分証明書もない。時計もなければ、携帯もない。……物欲は絶えない。着こなしているものは制服のみ。

無料で手に入る水のことを考えれば、行動するにあたつては、一週間はもつと思う。それとも、今からでも遅くないから学校を探して友達（顔も実体も解らない）の家にでも泊まりこもうか？ や、そんなこと今更出来ない。

考えれば考えるほど、今の状況に絶望を感じ始めた。大体、なんで自分は記憶喪失なんてものになつてしまつたのか……。どうして、

記憶をなくすのか……。答えが欲しい。ひたすらに。自分を休めた  
い。我儘を聞き入れてもらいたい……。誰かに、 甘えたい。

午前十時 。それは見つけた公園の時計に表示されていた数字。  
僕はベンチに座つてあたりを観察した。

比較的広い土地を持つた公園。緑が視界のどこからでも映る。トイ  
レもあつたし、水飲み場もあつた。 ここは、良い所だと素直  
に思つた。遊具は少ないが、その代わり軽い運動をするには持つて  
こいの土地がある。きっと子供たちはここでかけっこや野球等をし  
て遊ぶのだろう。少し、子供には勿体ないな、と思った。

じつとしていたら、陽は傾きはじめ、僕はそれを眼で追いながら力  
ウントをしていた。そして数え始めておよそ一万五千あたりを過ぎ  
たころ、夜へと、闇を徐々に落としながらあたりは変貌していくの  
だった。 不思議と、そこになんの感情も抱くことなく、僕の  
精神は安定していた。だからだろうか。今僕は、無感動だった。

夢と現実が入り乱れる、妙な錯覚に陥つた。あたりの彩色は  
異様の一言に変わり、視野という視野に、気持ちの悪いものが見え  
始めた。 それはまるで、情報のように僕の脳を刺激した。

気持ち悪いものが、頭を支配する。白黒、反転する。それに担  
うように、夜は深みを増し、全体をブルーで染め上げる。地面から  
何かが浮き上がる。それは文字にも見えたし、あるいは根本的な何  
かの様な錯覚もする。その時唐突に理解した。これら全ては、方程  
式なのだと。

「人が いる」

自分の咳きで我に返ると、辺りは真っ暗で、公園の街頭がポツリ  
と中心を照らしている、なんのことのない普通の風景を映していた。  
唯、自分の咳きの通り、人は、いた。

街頭に照らされるかの如く、直立不動の髪の長い女が、立つていた。  
ふと、何か違和感を感じた。 そしてそれにすぐ気がついた。  
僕と、その女の目が合つていた。視線が交差する。なんだ、咳きを

聞かれていたのか……？そう解釈した。そしてそれは間違いではなかつた。

「君は？」

向こうさんが咳く。別に、知りあいつて訳でもなかつたけど、おかしいかな、その時僕は話相手が欲しかつた。だからその咳きを聞いた瞬間から、この人と会話するのを待ち遠しく感じていた。

「良かつたら、お話でもしませんか？」

……我ながら不信感たつぱりの誘い文句だと思つた。でも意外なことに、彼女はそんな僕の咳きに付き合つてくれたんだ。

彼女はゆっくり僕に近づいてくる。光を遮るよつに歩いてくるので、逆光になり、表情は暗く読めなかつた。

やがて近づくその女。

「良いですよ」

そしてその女はそつ、やわらかく咳いた。

身の上話つて言つのは、案外「そばゆい」ものだつた。第一、自分には語れるほどの身の上話は無く、実を言つと会話なんてもの自体になれていない僕は、すぐこの状況に落胆することになつたのだった。

「えつと、真弥さんでしたっけ？」

「あ、はい」

彼女は、観察すればするほど、見とれるくらいの美人であつた。整つた顔、整つた鼻、猫の様な眼、長い艶のある髪、スタイル、そのどれもが一級品であることに違いはないだろう。それでも緊張せずに話せたのは、僕が極度の疲労感に襲われていたからだと思う。

「真弥さんはいつ記憶喪失になつたのか覚えてないんですか？」

「……わからないけど、おそらく、昨日の学校が終わつてからです。それまでは普通に生活していたつて、友達が言つてましたから」「何か、大きな事故に巻き込まれたとかは？……でも見たところ

怪我とかしてませんよね」

「さあ……。わからないです。わからないことだらけなんです」

「う、そうだった。僕は記憶喪失になつてから、自分についての情報、それに関係する他人の情報がまったくわからなかつた。情報とは、常に人が作るものである世界において、他人を知らないといふことは、情報を得られないといふことに等しかつた。自分という限らせた部屋では、いづれ自我が崩壊するのは目に見えて解つていた。いや、もうすでにそうなつてているのかもしれない。」

「これからどうなさるおつもりですか？」

「交番を探して、自分の家を教えてもらひつもりです。それ位なら交番もやつてくれるでしょ？」

「……ううですね。でももう夜も遅いし、今日は諦めたらどうですか？」

「いや、うん……。じゃあ今日はこの公園に泊まります。それで明日の朝になつたら交番探します。あ、良ければ交番が何所にあるか教えてくれますか？」

「構わないんですけど……。ああそうだ、なんなら私の家に泊まりませんか？ それで明日になつたら一緒についていきますよ」

そう彼女は言つた。その時どくりと心臓が跳ねた。なんの冗談かは解らないが、本人は至つて真面目に言つ。それはとても羨ましい提案だつたが、仮にも僕は男である。襲わないという保証などない。まあ、襲わない程度に紳士なつもりだけれど。

「良いんですか？ でも僕一応男ですよ……？」

「良いんですよ。それにそんな人には思えませんから」

そのまま上を見上げる彼女。その視線の先を追うと、満月が見えた。

「今日の月は奇麗ですね」

そして思つたままの感想言つた。

「そうですね。 いつまでもいじつしているのもなんですし、行きましょうか」

そして僕は彼女についていった。去り際に一言、

「満月は人を凶暴にするんですね」

と言つたところを考えると、なかなかブラックユーモアがお得意な様子であった。

月が歩く僕達を照らす。柔らかなその光は、何故か僕にとつて妖艶という言葉を連想させた。 怪しげに、されど美しく振舞う

太陽の鏡は、太陽を盗み見て夜と言う舞台に花咲かす。そんな私的に詩的なことを考えているうちに、公園から歩いて約三十分、彼女の家についた。

……外観は、ひたすらに丸かつた。円周の広い筒のような建物がどんどん建つていて。一言で言えば、変わった建物だった。

「この辺りではあまり見ない形の建物ですね」

思つたままを遠回りながらも伝えた。

「ええ、工房を兼任している家なんです」

「こうほつ、とは、工房のことだらうか……？」

「何かのアーティストなんですか？」

「まあ、そういうたところですね」

そんな彼女の解答に、僕はへえ、と、つまらない相槌を打つだけだった。

彼女の家の内観も相当なものだつた。……一階は広く、何もない部屋で、ここが彼女の言う工房なのだとすぐに検討がついた。では、部屋は一階なのだろうか。

「こっちです」

なすがまま、流される僕。

まあ、勝手が解らないのだから

そりやそつそ。案内されるままにこれまた円形の螺旋階段で二階にあがる。

とん、とん、とん、とん。反響する音。最後に、とん、と床を鳴

らし、上がった先には、異様な世界が広がっていた。

そのまま指す方向にいそいそと小走りをして行った。

ちつともまじじゃないじゃないか。なまじ見えてしまうと、さらにもオカルト性が上がった。

「理数系……ですか？」

何とも間抜けな質問だ。

「え？ ああ、確かに科学は得意な方ですよ」

この惨状を訪ねて良いのか悪いのか、よく解らない。恐らくは、僕なぞが踏み入ってはいけない領域の様な気がしてならないからだ。

「ごめんなさい、少し部屋がごたごたしてるけど、寝る場所位はちゃんとあるから」

柔らかく微笑む彼女。……だが寝る場所があつても、少し、いやかなりこの部屋で眠るのは抵抗があつた。文句は言えない立場ではあるが。

「ああ、お風呂沸いてるから、どうぞ。着替えはあいこへ出せませんけど」

有り難い話だ。一日風呂に入つていないだけで、梅雨時の今季節で、体はべとべとだつたからだ。

「一番風呂ありがたくいただきます」

「ええ、どうぞ。お風呂は端の方にあるから」

廊下を指差し、その一番奥にあるから、と次いで言つて、僕はそのまま指す方向にいそいそと小走りをして行つた。

ぞー、という音が流れる。否、文字通り流れていた。僕はシャワーを浴びていたからだ。流石に風呂自体に入るのは気がひけたから、

シャワーでますますここにしたからだ。

「どうして記憶喪失になんてなったんだら?」

今更な疑問が浮かびあがる。……今頃、居るであろう両親は自分を心配しているのだろうか?それとも、自分に両親などいないのか、一人暮らしなのだろうか。

疑問は募るばかり。そんな疑問を吹つ切るかの如く、シャンプーで頭をわしゃわしゃと洗つた。

それはとても良い、女性独特の匂いがした。

その後は礼を言つて、彼女が代わる代わる風呂に入った。  
それから出てきた彼女は、より一層美と言うものが引き立つているような気がした。そして食事も頂いた。歯ブラシは予備のものを使わせてもらひたし、専ら自分は客であった。いや実際そななんだけど。

「「めんなさい、床で良いですか

寝床の話だ。

「ええ、全然構いませんよ。てか、ベッド使わせてくださいなんて思つても言えませんよ」

笑いながらそひ言つた。彼女もくすりと一笑いし、ベッドの横に布団を敷いた。……ベッドとの距離は近い。どく、どく、と血管が暴れる。

「あの、俺一階でも構わないですか?」

「あ、一階だと汚れちゃうんで……。布団も」

「そうなんですか? ジヤあ、すみません。俺、絶対襲わないつすから

当たり前のことと、当たり前のように言つ。そんな自分が恥ずかしかつた。

「じゃあ、電気、消しますね」

パチリと言つ音の後に、黒が画面を支配した。変わりに徐々に暗闇の中にブルーと月の光が入り混じり、混沌としていった。

「おやすみなさい」

「おやすみなさい」

落ち着かない夜が始まった。が、極度の疲労状態にあつた自分は、そんな状況を考えずに、睡眠欲へと身を投じるのであつた。

思えば、選択肢を間違えていたのかもしれない。

夢の中で、

僕はそう思考していた。知らない人についていってはいけない、そう習つたではないのか？昔先生とかにさ……。そんな当たり前のことを俺は破つた。だから、これは当然のことだ。 体が徐々に覚醒へと近づく。それと共に脳が目覚める。否、それは完璧な目覚めだつた。脳の容量の半分以下しか使っていらないという人間の領分を遙かに超えている。それはほほポテンシャルの全てを使つているという状態だ。それは快感だつた。高速道路を三百キロくらいで走つてゐる感じ。

世界が情報に満たされてゆく。水のように途方もない情報の源を片つ端から脳みそは認識しようとする。コップから水が溢れるみたいで、なんだかそれは凄く勿体ない事をしているような……、ひどく、後悔した。

「目が覚めているのか……？」

唐突にそんな声が聞こえた。

「ああ、どうやらそうらしい」

口が勝手に走る。僕の意識レベルで出来る芸当じやない。いや、僕じゃない。総合して僕と言う自我があるだけで、僕という部品は沢山ある。僕は、総合的な僕はそんな部品の代表者でしかない。つまり、今喋つているのは僕であり、僕にあらず。そこまで考えて、意識は吹き飛んだ。

「君は……真弥なのか？」

あの妖艶とした女が喋りかけてくる。口調がずいぶん違うが、恐らくはそれが本来の彼女なのだろう。

「どうかな……。君こそ何者だい？ そう言えば名前すら知らない

そう俺が尋ねると、彼女は一寸戸惑い、やがてそれを忘れるが如く、こう答えた。

「私の名前は進藤 じんどう 司。つかさ 魔術師だ」

それはおおよそ自分の理解の範疇を超える答えだった。

目覚めは唐突に来るものだ。自覚していようがいまいが、目覚めとは確実に来る明日への、今日への一步であった。最も、それは目覚めが当然のように訪れる人にとっての話だが。 そう。目覚めとは同時に綱渡りである。目が覚めなければ、その間は無防備だし、一生目が覚めなかつたら、それは死人同然だ。自分はと言えば、普通に目が覚める人に分類されるので、前者だ。だが、それでもおよそ日常通りの始まり方を演じる事は出来ない。それが出来るのは満たされている人だけだ。

笑わせる。自分は満たされていないと言う。自分だつて、幸せに暮らしている一人の青年に過ぎないじゃないか。 それなのに、心は満たされていないと言う。何故なら、そこに有る筈の答え（現実）が簡単に割り切れるものではなかつたからだ。

「起きろ真弥」

乱暴な、それでいて洗礼された声が響く。その声の持ち主の名前を僕は知つていた。 進藤 司。本人曰く、一級品の魔術師らしいが、その、仕事とか、役柄とか、果てはこんなこと言うのもなんだけど、能力とかも一切不明。素性が知れない。僕に言わせれば二流の詐欺師であることは間違ひなかつた。

「起きてますよ」

そんな女性に僕は幾分めんどくさそうに答える。それが、僕についての、日常であつたからだ。または、非日常の日常、と言つたところか。……そう、現状が異常なのは理解出来た。出来たのだが

「司さん、なんで僕、住み込みで働いてるんでしょうが？」

「実は心の底から理解なぞ信じちゃいなかつた。

「君の都合も合わせて聞いた。周辺の事は私が何とかするから、君は雇われたまえ」

……変な言葉使いだ。しかしその言葉には絶対性があつた。僕といつ雀がなくより、鶴が一声出した方が、絶対性の強いのは当たり前だつた。どうしてこんなことになつたのだろう。でも僕は現状に満足している。それが、甚だ疑問だつた。

「一週間……」

ふ、と呟く。それは僕がここに滞在して、仕事に携わつた期間。そして、僕が記憶を失つてから一週間。……理性は解つてゐる。ここに居るのはおかしいと。しかし、本能が納得してゐた。ここに居るのは正常だと。まるで、体が住み込んだ我が家を恋しんでゐるようにも感じた。

「司さん。つかぬ事をお聞きしてもよろしいですか？」

「構わない」

「もしかして、魔術師なんだから、僕に暗示とか使いました？」

実はあまり聞きたくない質問だつた。これが公定されれば、それは間違いなく、彼女が魔術師であることも同時に証明してしまうからだつた。

「勘が鋭いな。しかし君は勘違いしてゐる。暗示とは、内側に秘めている優先順位というものを引き出す手段の一つだ。人間は願望に満ちてゐる。たとえば、お金持ちになりたい、死にたい、等。後者は自殺願望と言うな。その一つにこの家に住みたい。働きたい。元の家から家出したい、等があるとしよつ。暗示と言つのはそれらの願望をより強くしただけに過ぎないのだよ。君は例え暗示にかかつていても、自分の意志でここに居るのに違ひないのだよ。ちなみに、自分の意志を全く無視した選択をさせることを、洗脳と言ふ」

……全く理解出来ない説明で、落胆した。自分の知能が低いの

が、はたまた自分に知識がないのか、どうやらこの人の常識は、僕のちっぽけな物差しでは測り知れないようだ。でも、この人は僕になんらかをしたことは疑いようないと僕は思った。……本人は肯定しないし、何故僕を雇うのかも解らないけれど、“自称魔術師”は僕をしている（？）ようだつた。

「真弥、ばーっとしている暇があつたら犬の散歩にでも行つてろ」  
そう声をかける同さん。……実はここに来てから行つてることは専ら犬の散歩である。犬は普段は屋上にいて、散歩のときのみ屋上から下界へと降り立つ。おかしな話だが、ここで飼つている犬は縄で繋がなくとも付いてくるという万能犬つぱり。唯一やることと言えば糞の処理。糞をするとき、犬は気張るのだがその表情や行為をじつと見ていると落ち着いて出来ないらしく、見るなよと犬のくせに無言の圧力をかけてくる。……ちなみに犬の名前だが……

「キヤニス！ おいで！」

キヤニスと言つ。上方でワン！と景気の良い声が響いた。それからとてとてと激しい足音。器用に螺旋階段を降りる音だ。そして姿を見せたかと思うと、僕に飛びかかってきた。

「ほお、キヤニスによく懐かれてるな。真弥」

「懐かれてる……というか、友達みたいなもんです。よく駆けっこをするんですが、犬には勝てません」

「ふふ。なんなら私がその足を改造してやるうか？ 科学は得意な方だ」

怖氣の走ることを平氣でいう。勿論そんなお説いはお断り。

「断固拒否します」

それを合図に、僕とキヤニスは走つて散歩へと出かけたのであつた。

白い風があたりを駆け抜ける。又は、それは弾丸というのだろうか。

その風の正体はと言つと、キヤニスという一匹の犬であつた。散歩に使つている場所は、同さんと出会つたあの公園。公園

の名前は楠くすのきという。楠公園。今のところ、僕が一番気に入っている場所だ。

キヤースはと言えば、太陽の日を燐々と浴びて、大いにその身体能力を活かしきっていた。……僕が来る前は司さんの役割だった筈。しつけは行き届いているし、きっとストレスのたまる生活を強いられたのだろう。ベンチに座りながら僕はそんなことを考えていた。

「キヤース」

声をかける。すると寄つてくるキヤース。

「お前も苦労してるんだな……」

無意味にその頭を撫でてやる。……触り心地が良くて眠くなる。キヤースも気持ちよさそうに眼を閉じて喜ぶ。こんな何気ない日常。でも僕はもう昔には戻れなくて……。それは酷く矛盾しているよつに感じた。キヤースは、どうして司さんに飼われているのだろう。僕みたいに、拾われたのか……。いや、その言い方だと、僕がまるで家畜みたいじゃないか。それに拾われたって……。

「いや、実際にそうなのかもな……」

司さんがいなかつたら、僕は現実と対面しなくてはならなかつた。僕は記憶の自分と対面しなければならなかつた。僕は、僕自身と向き合わなければならなかつた。

いうなれば、現状は逃げだ。それに甘んじている自分も、逃げだ。たとえきっかけは他人（司さん）にあろうとも、今、僕は逃げている。いつか望んだかのように、他人に甘えていた。これで良いのか？

「わん」

その声に思考は遮られた。

「キヤース……。俺、どうしたら良いんだろうな？」

「そんなこと、解る訳ないだろ？」

「わっ！」

思わず驚いた。キヤースが喋った……？でもそれはすぐに錯覚だ

と気がついた。顔を上げると一人の女の子。歳で言うと十一歳位。

時刻は午後十三時。結構時間を潰していたらしい。でも、学生がこんな時間に出歩いているなんて、少しおかしい。

「驚いた。まあ、それもそうなんだけだな」

でもそんなこと言つたら僕も怪しい人だ。……幾ら十八歳だからと言つて、流石に学生の匂いというやつは抜けきつていらないだろう。おおよそ二一歳には見えまい。少女はキヤニスを撫でながら顔を上げた。……よくよく考えてみたら、この子、少し言葉に棘がある。

「キヤニス……なるほどまさしく犬だな。中々直球で捻つた名前だな」

……僕の周りにはこんな言葉使いの女性しか集まらないのだろうか。

「それってどういうことだい？」

そういうと、彼女は怪訝な顔をした。

「お前がつけたのであるつ？」

……エキセントリックな喋り方だ。

「違うよ。この子の飼い主は俺じゃないんだ」

「そうか……。この子の名付け親は相当な皮肉好きだな

「どうしてだい？」

そう聞くと彼女は適当な木の枝を拾つて地面に文字を書き出した。

「c a n i s？」

それを読み上げる。カニス？……何のことだらう。

「c a n i s<sup>キヤニス</sup>だ。キヤ、ニ、ス。その犬の名前であるつ？」

「それがどうしたの？」

「これはラテン語だ」

「ラテン語？」

そういうと彼女は得意げな顔をしてこうついた。

「犬つて意味だよ」

「……なんと」

キヤニスとは、正しく犬だった。

「読みつて、これであつてるの？」

「さあ……。私は辞書で引いたことがあるだけだし、発音までは解らんよ」

……一見博学そつだなと思つたけど、やはりそこは一学生。口調の所為で大分大人びたよう感じたけれど、落ちがあるとそんなことないな、と感じてしまう。

「君、そういうえば誰？」

今更ながらに当然の疑問である。

「私が？ 私の名前は楠 くすのきがえで楓。ああ、ほら、この公園の地主の娘だよ」

「何ですと？」

「楠 楓！ この公園の地主の娘だ！」

「ああ、いやいやそつじやなくて、ふうん、君がこの公園のねえ……。この公園、僕一番氣に入つてるんだ。ありがとね」

偶然の出会いの割にはさつぱりしていた。まあ、実際他人通しが会つたらこんな感じだろ？

「私のおかげつて訳じやない」

「それもそうか」

「たゞ少しくらい感謝されるのも悪くない。犬が可愛いしな」

そう言つと、彼女はにこやかに笑つた。笑つた彼女は純粋に可愛かつた。

「……、君とは友達になれそうな気がするよ」

「気持ち悪い」と言つた。中々嬉しいこと言ひじやないか

「どつちだよ……。でもまあ、お互い嘘とかつけそつじやないよな

「私は正直者だからな」

「それは言い得て妙だな」

はははとお互い笑い合つ。なんだ、まあ、笑いどころの解る笑いではないのは確かだ。それでも、何かおかしくて、俺達は笑つた。

「お前の名前は何なんだ？」

「僕？ 僕は 三木谷 真弥」

最も、その名前は自分から得た情報ではないのだが。

「真弥か。真弥はいつもこの公園に来ているのか？」

「うん。最近は良く来るよ。実は僕、最近拾われた人間でね。この近くに円形の家があるんだけど、そこで犬の散歩に行くように命じられてね」

「拾われた人間……？ どういふことだ？」

若干不安そうな色を浮かべた瞳。そこには間違いない悲しみと言う色が含まれていた。……どうやら勘違いさせてしまったようだ。

「ああ、いや、雇われた。雇われたってこと」

「なんだ、そういうのか」

「ああ、そうや」

それから僕は楠さん（何となくそう呼ぶことに決めた）と色々なされど他愛のないことを話した。そのどれもが核心のない周りが聞いたらつまらないことだらうけど、それでも僕らは楽しんだ。会話の合間にキヤニスも、わん、と相槌を打つてくれた。そして、ふと尋ねた。

「そういえば、学校はどうしたの？」

「学校……か？」

「うん。こんな時間に歩いているのって、学生のうちは珍しいでしょ」

「ああ、……今学校では二者面談をやつしているからな

「当然のように言つ彼女。いや当然なのだらうけど。

「ああ、なるほどね」

僕も経験がある。二者面談のうちほ学校が半日授業になつたりするんだ。なんら疑問はない。

それから、僕らは長い時間話していくと思つ。

「あ、もうやるやう帰らなくちゃ。少し長くじ過ぎた……」

「もう……行くのか？」

「ああ、楽しかったよ」

「そうか……。私としてはもう少し喋りたかったが……」

「明日があるやー。また明日会おうよ。まだ二者面談やつてるんだ  
う?」

「あ、ああー。勿論や。楽しみにしてるよ真弥」

「僕も、キヤースも楽しみにしてるよ。なあ、キヤース」  
それにワン、と答えるキヤース。そこに今は夕前で呼ばれているか  
ら等といふことではなく、確かな絆があると信じたい。そして僕達  
は別れ、帰路についた。

聞かなければよかつた。そう思つとこいつことは、聞いてから起き  
ることだった。例えば、午後の眠い時間に先生から突然テストです、  
とか言われたり。……ああ、そんなんじや最悪とは思わないか?出  
来る人は出来るもんな。

じゃあ、他人からいきなりお前は死んでいると言わたなら ?

「そう言えば……」

帰つて早々の一聲、それは僕から発せられた声だった。キヤース  
はと言えば、屋上でのんびり昼寝でもしているのだろう。

「どうした?」

司さんがここ一週間で見せたことのないことをやつてている。……  
書類を書いているのだ。

「いえ、僕つて一週間も学校に行つていなことになるんですね。  
これつて流石に不味くないですか?」

「……ああ、それならこちりで話をつけた、って言わなかつたか?」  
そんなの初耳だ!

「聞いてませんよー。いつたいどういふことですか」

「まあ待て、そこらへんの話は凄く面倒なんだ……。それでも聞く  
か……?」

「もちろん」

苦虫を潰したような顔をする司さん。眉間に皺をよせてやれやれ、  
と首を振る。

「もう少し待て、この書類を書いてからだ。この書類、お前に無関係ではないぞ」

「そこら辺のことも踏まえて説明してください」

「君はめんどくさい人間だなあ……」

「茶化さないでください」

なんだか無性に腹が立つてきた。

机に向かい、書類を書き続ける司さん。

「まずは……魔術について説明しなくてはならない。それでも聞くかね」

「丁度良い機会です。司さんに聞かってしまった以上、無視しては通れません」

もつともだ、と頷く彼女。

「では、説明するぞ。まず世界は方程式で出来ている。様々な式が分布されていて、その結果の上に世界は成り立つている。……式を改編し、イコールを神秘的現象、この場合手段が神秘的だと言つてはいる、に昇華させるのが魔術。方程式を改編し、世界に新たな結果を植え付けるのが魔術式。魔術式とは、世界に何らかの影響を与える、そうだな……、概念的なものでも可。言葉などのフレーズでも“影響”を少なからず時間枠内に影響させるものなら魔術式として成り立つ。ある手段を使い、式を完成させることによってイコール魔術になる。魔術師とは常に科学的であり、世界のブラックボックスにある仮定を埋め込むことによりイコールを実現させる。その式の内容は様々で、手段が違うが結果が同じになる場合もある。解つたか？」

もちろん、そんな説明、口頭で聞いても頭に入る訳はなかつた。

「もう少し噛み碎いて説明してくれませんか？」

「いや、これでも十分噛み碎いているのだが……、そうだな……。

魔術とは科学の応用に過ぎない。手段が物質的ならば大概是科学だ。魔術は方法を問わない。尤も、手段が限られるのは両方同じだけどね。要は世界のルールに則つた発明が科学で、世界のルールを応用

したのが魔術だ。解つたか？」

「いえ……その、まあ概念的には。けどそれと今回の件、どう繫がるんですか？」

「まあ聞け。」じりじり辺の話はややじりじりになると、たばかりだらうに。……魔術師の仕事と言つのを知つてゐるか？」

「知つてゐる訳ないぢやないです。説明してもらつてません」「そりやそうだ。魔術師とは基本的に仕事を選ばない。普通に生活するものもいるし、特と云つて特別なことは何もしない。……いや、仕事をしてゐる、普通の生活をしているものは少ないな……。魔術師は、対外は自らの究極を求めて研究をする。そしてその一生を終える。私の様に娯楽を楽しむものは僅か、否、彼らにとつては究極にたどり着くことこそ至高の娯楽と言えよう。そしてそんな彼らをまとめ上げる組織がある……。」

「司さんは、ぽろりと、とんでもないことを言つてゐるよつた気がした。そして数舜遅れて理解した。

「なんだつて？ 国は魔術を許容しているつて言つの……？」

ふう、と息を吐く司さん。その姿は口淋しそうに見えた。

「そう、国は各々の土地に住む魔術師を管理し、コントロールする。場合によつて魔術師を排除するのも国だ。……分不相応な力を持つ人間なんて、この世に必要はないのさ。……続けるぞ。国が魔術師を管理するにはもちろん訳がある。なんだと思う？」

「魔術師の反乱を防ぐ為……？」

「うむ。昔だつたならそつだらう。だが実際はそんな反乱を起こせる程の人数はいないし、科学の力は強大だ。一国に数百人いるであろう魔術師共では革命なぞ起こせないのさ。組織は国だといつたな。国は国」と魔術師を管理することによつて魔術師を一か所に集まらないようにしてゐる。これは反乱を防ぐためではない。魔術師の求める究極を避けるためだ。では魔術師が求める究極とはなんだと思つ？」

「まさか……世界征服、とか？」

「はずれだ。だが当たらずも遠からずと言つたところだな。

魔術師の究極とは世界の一部にあることにある。そもそも世界とは方程式で出来ている。その式を改編するのが魔術。ならば自らをその式の一部にし、世界にルールを書き加えられたらどうだと思つ?それは、誰にも邪魔をすることの出来ない究極だら?つまりは、そういうことだ

つまりだ……。悪い例で言つて、竜巻などの自然現象がもう一つ出来ると思つていい。そう、同さんは継ぎ足していった。

「そんな……。それって、何にも繋がらないじゃないか。結局常識が一つ増えるだけで……そんなの、意味無いよ……。まさか同さんも、そんなの?」

「私の目的はそんなものじゃないや……。それに私は国に管理されている魔術師だ。一度管理されると後々まで未来永劫管理され続ける。そうなれば魔術師としての自由などは無いに等しい。……まあ、その変わり特典もある」

そこまで言つと、更に溜息をつく同さん。

「特典つて?」

あくまで冷静に、そんな彼女のスタイルが彼女自身を冷静にさせている。

「一、国から補償金が出る。二、一般的な制限がなくなる。銃器の所持、麻薬、酒、パスポート、免許、果ては義務教育などのだ。三、魔術師一人につき一人だけ弟子を雇うことが出来る。四、弟子に対し師は保護者としての権利を持つことが出来る。五、これらの特典の代わりに死体や研究成果は国に提出する。……」ここまで言えば解つただろう?」

「解らないですよ……。つまりは何が言いたいんですか?」

やれやれ、と同さんは呟く。少し、癪に障る。

「つまりだ。私がお前の保護者になつたと言つことだ。親であり、師であり、同時に対等な人間だ」

。

……いや、まさか……、それは流石に、おかしい。おかしくておかしくて、笑える。

「ああ、そうだ。君の親御さんとも話はつけたよ。学校にも。この書類はそういうことに対する証明書のようなものだ」

「親は……居たの？」

あまりにまぬけな質問。でも、泣きそうになる。俺に親がいたと知つたと同時に、決別。……脳がついていかない。親との決別……、国が魔術師を許容していく、良いよつに扱つてこる。そして、僕が司さんの、弟子……？

「ああ、いた。ちなみに君は一人暮らしだったよ。色々といたはあつたが、そこは語りたくないね」

ふい、と窓の方を向く司さん。…………その様は、何と言つかまさに語りたくないと体で言つているようなものだった。

「聞きたくもない……」

決まつてしまつた。僕は、…………僕は、逃げたと同時に、新たな現実と対面しなければならないということ…………。どうして……。そう思つと、怒りが込み上げてきた。

「どうして…………、どうしてそんなこと勝手に決めたんだよ

！！！　おい、司！！！」

「…………がなるな…………」

一喝。それは激しい叫び。僕は、…………俺は、黙るしかなかつた。「悪かつたと思ったがね、仕方なかつたんだ……」

暗い表情をする彼女は初めて見た。

「それに君の両親とも会えないと言つて詫びではない。その気になれば私が会わせてやるつ

…………な、

「なんだ……。国が認めたことだから、もつ無理かと思つちやつたじゃないか。それなら全然構わないよ……。あ分ね

「 現実とは、そうはないのだよ」

「 未だ暗い表情の彼女。そこには諦めといつ色が見えた気がした。

「 理由は ？」

僕はなるべく優しく問い合わせた。それは、僕のつまらない癪癪で司さんを落胆させたくなかつたからだ。 長い沈黙が続く。彼女にとつては珍しい、濁つた間。いつもの凜とした声を、僕は聞きたかった。けれど 僕はこの数舜後に、聞かなければよかつたと思うことになつたのだ。

じやあ、他人からいきなりお前は死んでいると言われたなら

？

。

。

「 それは お前の、記憶はもう戻らないからだ」

それは同時に、その優しさを蔑ろにするほどのショックな知らせだつた。

「 冗談でしょ……？」

「 ああ、冗談だ」

嫌な間が続く。

「 勘、弁、して、下、さいーー一瞬真に受けちゃつたじゃないですかーーー！」

「 ああ、中々見れないレアな表情だつたぞ。まるで世界に見放されたような絶望感。およそ人間のする顔じやなかつた。興味深い」

「 まさか今までの説明も全部ウソつてわけじやないですよね」

「 いいや、それらは事実だ。認めたくないがな」

「 じゃあ、ということは、僕は司さんの、弟子つてこと?」

「 形式的にはだな。当面は必要ないと思われる魔術は教えない。雑用をこなせ。そしたら給料も出してやる」

有り難い話なのか、果てはそうでないのか。でも、特別つて言つ感じがあつた。自分は選ばれたんだ、とそう思つよつになつた。

案外、この生活は、悪くない。自分で、絶対この思考は間違

つているという自信がある。だけれど、案外悪くないのだ。本能が、ここは俺の住み家だと呟く。理性はそれを反発する。でも、気に入ってしまった。問題は山積み。それも後回しにしたくなる。

それは逃げの思考。僕は誰かに甘えていた。現状に甘んじている。でも、もう少しだけ。大変になるその時まで、僕は、司さんについていこう、そう、思い。

「でもいつか、記憶を取り戻さなきゃ……な」

その時は、全てを返上しよう。

ここになしか、その時の司さんの表情は、堅く険しいものに感じた。

「悪いな、司。」いつ話はもう少し節度を見て話したかったが……

「いえ、今日は良い機会でした。きっと記憶が戻るまでの付き合いになるでしょうけど、それまでお願ひします。」

「……ああ、私も君に無理強いはしない。よろしく頼む」

それは、司さんから聞いた初めての頼みごと。

翌日の朝。僕は早めの散歩へと出かけた。時刻は午前五時頃。すっかり目が冴えた犬、キャニスをその散歩のデート役に誘つた。ちなみに、男の犬だ。

朝、薄暗いが清らかな風と空気が僕等を包み込む。……少し肌寒くて、ぶるる、と体を震わす。

僕達がまず向かつたのは、やはりというか、結果として楠公園になってしまった。ここに来れば、また何か新しいことに出会える気がしたからだ。そして、その予想は強ち外れてもいなかつたのだ。

「楠さん！」

「わっ！」

「あはは、昨日とは立場が逆だね

朝早くからベンチに座っていた少女、楠 風は体をびくりと動かし硬直していた。……しまった、後から脅かしたのが悪かったのか……。いや、悪かったのだろう。

「全く驚かす……。おはよう、真弥、キヤース。朝は早い様だね」「それはお互い様だろ?」

「ああ、そうだな、と頷く。わん、とキヤースも吠えた。

「私は良く朝の公園に来る。……人気も少ないし、何より過ごしやすい。肌にやさしい風、乱暴な光ではないやわらかな光。それらが気に入っている」

今日の彼女はおしゃべりの様だ。それなら、次いでに聞きたいことの一つや一つ、ぶつけてやることにした。

「……そう言えば、学校の事、聞いていいかい?」

「……ああ、構わない。なんなら私が語つてやろう。それに相槌でも打つが良いさ」

「そうする」

素直にその提案に従う。彼女はうん、と頷いて語りだした。

「そうか……。私は中学の一年生だ。楠中学に通っている」「楠つて、まさか

考えるまでもない。組織だ。

「そう、学校も楠の家が創立した。……有り余る財力、そしてこ

こら一体を牛耳っているのも楠。言うのも憚れるが、腐っているよ

そう言って、彼女は俯いてしまった。でも、言葉はそれで終わりじゃなかつた。

「この前、お金を借りに来た人がいたんだ……。その人は楠の所為で困っている人なのに、楠はお金を貸すことしなかつた……。楠は外部に多大な影響を与えていて、保身に走り自己の利益しか優先しない。そんな家、私は嫌いだ」

込み入ったことはここでは聞かない方が良いだろう。思ったより深い話になってしまった。……楠、それ程までにデカイ、色々な意味でだが、組織だつたとは……。

「まあ、そう簡単に決めつけるのもいけないよ。よく考えたつもりでも、そういうことに走る裏側にある本当の理由っていうのは意外にあつさりしているものや。案外、そつと口ひ保身は君の為なのかもしれないし」

たどたどしい言葉で、自分の考えを伝える。なぜか、そんな当たり前のことだが、とても重要な思えた。

「嘘だ。私の為だなんて、絶対に」

「まあ、そりかもしない。でもそれが空回りした愛情だったら、

君が気づかせなきやね。これは間違っている、と」

「私が…………？」でもそんな権限私はない…………」

「権限じやない。それは誰もが持つている権利なんだ。イエスをイエスって言う権利、ノーをノーって言つ権利。それは人として当たり前のこと何だ」

「当たり前…………そう、そうだよな！」

うん、うん、と頷きながら自身に言い聞かせる彼女。……正直彼女が羨ましかった。何故、と問われると自分でもわからないが、唯ひたすらに、若いな、と思つた。成熟しているようでもまだまだ青い。そんな彼女のありかたが好きだった。まるで、自分が年寄りみたいじやないか。

「少しばは吹つ切れたかい？」

「ああ、御隠さまで。本當だ。お前の言つとおり、口に出してみると簡単だな」

「口に出してみるとね。まあ、それを実行するまでがめんどくさい」と言つた。

「そう言つと、怪訝な顔で彼女は僕を見つめなおした。

「お前は、自分から言つといてそんなことを言つ…………」

「この腑抜けとでも言つたような彼女。…………何を失礼な。

「少しばは見直したと思ったが、一気に落胆した。お前には失望だよ

「なんであつて一日田のやつにそこまで言われなきやなんないんだ」

そこで少女は眼を丸くした。

「そりが……。私達はまだあって一回しかたつていないんだな」

「そうだよ?」

「そう言えば、確かに一回でこれだけ仲良くなれてるって、僕も何か珍しく感じてきた……。」

「僕達って、仲良しだよね」

当たり前のこと当たり前のように言つ。

「口で言つのも憚れるな」

「……どうでもいいけど、憚れるって多用します、ぎだよ」

彼女は拗ねた素振りを見せてこう言つた。

「良いじゃないか、最近辞書で引いたんだ。使わせてくれ」  
やつぱり博学に見えて博学でもない彼女。でもそこがチャームポイントだな、と一人そんなこと考えた。隣に座り込むキャニースを撫でる。嬉しそうに、くぅん、と鳴くキャニース。

「お前の話も聞かせてくれ」

唐突に彼女がそんなことを言い始めた。

「僕? ああ、別に構わないけど……」

でも僕の身の上話なんて記憶を失つて以来だから、一週間くらいしかない。知識のある赤子がいて、それで一週間の事を語つたとしても、それは楽しいのかどうか……。それに魔術師とかは伏せなきやならないし……。多分、信じて貰えないだろうし……。

「まあ、実を言うと僕、記憶喪失なんだよ」

「記憶喪失って、あの記憶喪失か?」

彼女が首を傾げながらそう聞く。

「そう、その記憶喪失」

「ああ、それで一週間前、僕は路頭に迷つたんだ。 頼れる友

達なんていなかつた。唯ひたすらにさびしくて、誰かに甘えたいと思つた。そんな時、司さんつて人にあつたんだ」

「司さん?」

オウム返しに彼女が言つ。それに対し僕も、司さん、と答える。

「そう、その人はとんでもない人で、……自分でもよく解らないけ

ど、今住み込みで働くことになっちゃったんだよね……

「それって危なくないか……？」

当然のことを見つめた。

「そう。僕も理性では理解しているつもりなんだ。これは可笑しいつて。でも本能的な部分でここにいたいって思つてる。矛盾しているよね。……たぶん僕はそういう魔法でもかけられたんじゃないかなと睨んでる」

魔法……、と彼女は呟く。 そういえば、魔術と魔法とは一緒なのだろうか。今度司さんに聞いてみよう。

「でも、家人の人とか心配しているんじゃないかな？ それに検索届けとかも出されてるんじゃ……？」

……話によれば、そこいら辺は斤づけでくれているところのことだけれど……。

「まあ、見つかつたらそれまでの付き合いだな」

「良かつた。それなら両親も安心だな！ それに、その司つて人……、良いイメージが湧かない」

妙に彼女らしからぬことを言つ。 それは、確かに言えてるんだけど……。

「いや、基本的にはいい人だよ、司さんは。唯、少し悪い癖があるかな……」

百歩譲つて良い人、ということにはしておこう。 実際良い人だし。

「そうなのか……？ でも、聞いたイメージだと司つて……」

その後ぶつぶつと念仏を唱える彼女。……そんなに僕の話の中で彼女の中の同株は下がつたのだろうか。

「まあ、僕が話せることって凄い少ないんだ。それにいつまでも現状に甘んじている訳にはいかないし」

「そうか……。でも、もしお前がこの土地を離れたとしても、この場合両親に見つかってだが、私と会えなくなることはないんだろう？」

「ああ、いつでも会えるさ」

「そつか、それなら、良いんだ……。折角出来た友達と離れるのは

惜しいしな

「友達なら学校に居るだろ?」

楠さんの顔色が曇つた。

「……あんな奴ら、上辺だけの付き合いや」

「言いたいなら言つてもいいけど、無理には聞かないよ」

「いや、いい。ありがとう。いつかは私が解決すべき問題だ。抱えきれなくなつたら相談するが、その必要もないだろう」

そう言いきつた彼女は、ただ純粹に凜々しく、カツ「良かつた。

「もうすっかり朝だ。私はその、学校に行かなくてはな……。もし

その気があるなら、午後に会おう」

そう言つて、彼女と別れた。

その日の午後、彼女と会つて話をした。その次の日も、そのまた次の日も、僕らは次第に仲良くなつたし、家の事も雑用以外押し付けられることもなく、平凡に過ぎて行つた。そしてある日の朝の出来事。円形の魔術師邸にて。

「そう言えば司さん、魔術と魔法の違いつて何なんですか?」

魔術師は眼を細める。きっと日の光が眩しいのだろう。

「いやに唐突だな……。まあ良い。知つておいて損はない」

そう言つと、彼女はおもむろに胸ポケットから煙草を取り出して火をつける。そしてそれを吸つて一言、まずい、と言い火種を消した。……全くもつて無駄な作業だ。

「魔術とは方程式、これは理解出来ているか?」

「はい。なんとなくですけど」

「魔法とはだな……、イコールが釣り合わない魔術の事を言つ

「イコールの釣り合わない?」

結局、今回も満足のいく理解は出来そうになかった。

「ああ、そうだな。たとえばだ。とてもなく簡単に言つと、  
1 + 1 = 2があるとしよう。そして2は炎だと解釈してくれ。魔術と

言つのはこの式を $1 \times 2 = 2$ にするのと同じなんだ。手段は違えど結果炎になる。だが魔法はちょっと捻りがあつてだな……、 $1 + 1 = 2 + a$ となる。付属効果と言つやつがついたりすると魔法だな。だが大概の魔術師は魔法を使えない。何故なら魔術とは科学であるからして、科学でなしえないことは媒体なしにはなにも出来ない。つまり、魔術が世界の決まりの応用なら、魔法は世界に関わることでなせる技なんだ

そこまで言い切ると、彼女は又煙草を取り出して新たに火をつけ始めた。背伸びしたい年ごろなのだろう。

「今日は噛み砕いた説明で解りやすかつたです。でも、媒体を使つた魔術つてどういうことですか？」

彼女を見ると、やはりまずい、と言つて煙草をかき消していた。そんな彼女はめんどくさそうに面を上げてこちらを見る。そして如何にも君は馬鹿かね、と言いたそうな様子だった。

「魔術に媒体はつきものだ。科学がそうであるのと同じにね。ああ、私の説明が悪かつたな。唯單に付属効果、例えば炎を青くするとかは炎を出す媒体に加え炎を青くする媒体があれば出来る、と言つたかったのだ」

「あ、なるほど。塩化カルシウムや酸化銅がこの場合の $+ a$ になる媒体ですね」

「そういうことだ」

……魔術の世界とは、奥深いものだ。

「そういえば、僕には魔術を教えてくれないのですか？」

煙草は飽きたのか、今度はパイポを口にくわえている彼女。

「ああ、君はどうせ使いたくても使いこなせないさ……。魔術つていつのはそう誰もが便利に使えるものじやない。こいら辺も説明しどくかね？」

「出来れば手短にお願いします」

「ふうー……。良いだろつ。魔術式とは、世界と言つノートに文字を書く力がいる。それは世界とリンクすると言つことだ。世界に干

渉する力がいる。君は神の手って聞いたら何を思い浮かべる？

それは唐突な質問だった。

「沖縄で撮影されたあの凄い雲の写真ですかね」

「……まあ、想像はつかないだろ？」「

どうやら大外れだったようだ。

「必ずしも手と言う訳ではない。干渉方法は多種多様だ。……神の手、とは概念に触れられる手の事だ。世界の概念に触る、ということは一部ではあるが世界と意思疎通を行うという行為に等しい。世界に侵食される可能性もある。私達はそれを文明という防具でガードしながらそれらに干渉し、式を捻じ曲げる。結果こう言った……」

そこでいつたん言葉を区切り、手を宙に広げる。そしてその手のひらからぼつ、と炎が飛び出した。

「発火現象を起こしたりすることが出来る」

それは、幻想的な光景だった。

「だが我々は干渉することは出来ても、概念を見ることは出来ない。概念を見る、汲みとると言う行為は、脳が世界に干渉するということだ。それに耐えうる脳は未だかつてないし、それに誰もそんな神様の眼を持つことは許されなかつたのだ。ああ、よく漫画や小説等で魔術、又は魔法を唱える描写の際、呪文というのが存在するだろ。あれは他の干渉手段と大差はないんだがね、如何せん古くから伝わる業だから、付属効果つまり、威力が強くなる。自己暗示、というのもあるのだが、古くから伝わるということは、使いならされると言うこと。つまりはそういう回路が出来やすいのだ」

そこまで言つて炎と言葉を区切り、司さんは再び気だるそうに伸びをするのだった。

その次の日の午後。僕は雑用をこなリキニースの散歩に出かけていつもの公園へと向かつた。公園でついて目に入つたのは、休日独特の雰囲気で、子供たちだけではなく、学生達の姿も見える。そうか、今日は日曜日だつたな、とそれで気が付く。普段は滅多に来て

いない人達が見える。……少し、緊張した。

そしてベンチに彼女を見つけた。

「よつ、楠さん」

「おはよつ、真弥にキヤース

そう、ゆつたりとした調子で挨拶をした。

「早速だがこの掌を見てくれ」

そう言いながら僕は掌を宙に浮かせる。

「えつと、式を捻じ曲げながら、発火現象を起こします。

ぼ

「！」

口で言つてみたが、何も起こらなかつた。

「何してゐるの？ 恥ずかしいんだけれど」

「ああ、ごめんごめん。司さんがマジック見せてくれたから、俺にも出来るかな、と思つて」

まあ司さんは文字通りマジックだつたが。

「ふうん。司さんつて、手品師なのね……」

「ああ、たぶんそんなところだと思うよ」

僕達は今日ものんびりと他愛のないことに花を咲かす。そんな時だつた。

「あれ？ 楠さん、公園に来てたの？」

一人、知らない女の子が割り込んできた。ツインテールに縛つた平穀そうな少女。おそらくは楠さんの友達だろう。

「え？ エエ……」

でもそうだと言つのに、楠さんは浮かない表情をしている。

「その人は？ もしかして彼氏？」

「どうやら僕の事を指して言つているらしい。」

「……え？ エエと、違います」

そんな曖昧な返事をする楠。……普段とは大違ひだ。だからだろ

うか、気不味い沈黙が続いてしまつたのは。

「ごめんね、急に話しかけちゃつて。私、向こうでみんなと遊んでるから！ またね」

そう言つて、彼女はとてとてと向ひつ側に言つてしまつた。

「おい、どうしたんだ？」

「氣だるそうにしている彼女。そんな彼女を見るのは初めてだつた。

「私、あの子の事知らない……」

困惑する彼女の表情。

「 知らない？ まあ、きっとクラスメイトか何かなんだろう  
な 。 友達大切にしろよ？」

そう言つと、悟つたような表情でにこやかにこつちを向いた。

「友達なら、あなた一人で十分幸せ……」

それは不思議な含みがある一つの言葉の旋律だつた。

「それは、そう言われば悪い氣はしないけど、対人関係は高望し  
た方が良いくらいだ」

それでも彼女は、そのうち頑張る、と曖昧な返事を残し、もう行  
かなきや、と言い何所か、おそらくは家へと帰つてしまつた。

仕方ないから俺達も引き上げることにした。近所の知らない餓鬼  
に触られて心地よさそうにしている白い犬を呼ぶ。そして子供から  
離れよつてくる犬。名残惜しそうに見ている子供。 子供には  
少し悪いことをしたな。

そして公園を後にしたのだ。

「…… いかして会うのは、最後になるかもしないな

彼女の声が聞こえる。

「楠も余計なことをする。  
あんな演出は背筋が寒くなるだけ

「たとへりの」

「ハーリー、今のう前二  
楠。楓。彼女の声だ。

意識が朦朧としている。……場所はおそらくいつもの公園。だが、

圧倒的に意識が足らないから、自覚出来ない。

「ああ、悪かった。今後は少しここにこことほしないつもりだ。許してく。後最後の一言書つかへく。」  
子供が泣く。眞理

そこで、意識は途切れた。

それは滅ぼさなければ自分の存在が危うくなるもの。

決して相容れないもの

それは自分自身

敵

2

その日は、何でもない日である筈だった。唯、一通の手紙が来て  
いたことだけが、少し意外だつたくらいで。もうここにきて三週間  
が過ぎようとしていた頃の話だ。三週間の間は公園の少女と遊ぶ日

楠さんは……よくあの公園にいる。時間帯を問わずこる」ともあつた。詳しくは聞いていないが、あまり学校への関心はないのだろう。

司さんの方をふとむくと、彼女の顔はじにじうなしか、引きつっていた。

「敵だ……」

進藤 司は無意識のうちにそつ咳いていた。弟子である僕はその咳きをいつものジョークと同じユアンスで聞いていた。

「突然どうしたんですか ？」

手紙を開いた彼女は、眼を見開いたままじつ咳いた。

「どうもこうもない。 敵だよ」

てき ? 敵のことだらうか。

「敵つて、司さんにそんな人居るんですか？」

「ああ まあ、人並みに恨まれてはいるな」

それつて、人並みとは言わないんじゃ 、といつのは置いておいて。

「やばいんですか？」

「そうだな……。意外な奴に田をつけられたものだ」

会話を遮る爆音。

そしてそれは唐突に現れた。

ぱりん、と窓ガラスが割れる音。 その数全て。 一瞬にして粉々に変わった。 その代わり、強い風が部屋の中に吹き荒れる。 だがそれに動じることなく部屋のものはぴくりとも動かない。 ……理解した。 これが、魔術なのか。

進藤 司を見る。 司さんは何かを言つてゐるよつに感じた。 しかしそれは風にかき消され全く聞こえなかつた。 それが魔術の詠唱だと気がついたのは数舜遅れて。 そしてその数舜の間に窓から敵が現れた。

それは、長身の男性だった。

それと同時に完成する魔術式。 そう言えば司さんが言つてゐた。 時間枠に影響するものならば魔術式として成り立つと。 そして手段は多種多様だと。 そういうことならば、これはマジックワードと言えるであるつ。

途端、目の前を真赤な閃光が走る。それは高熱度を帯びた火の玉だつた。びゅん、びゅん、と飛び交うそれは僕にサークルを連想させた。

それがサークルなら、相手はピエロだつた。相手はそんな火の玉に臆することなく、それらを華麗に避ける。その代償に、家のトイレだつた部分が火の玉によつて死んだ。物凄い熱が途端向こうから伝わる。熱風だ。

「今更何の用だ？ 私は国に管理されているし、規約を破つてはないぞ。ちゃんとそつちの都合の良いように動いていたであらう」

すると長身の男が口を開く。

「そつちの坊やに用がある

「真弥にだと？」

僕に？

「どういふことだ」

「詳しく述べえないな。だがしかし、確実にそいつだけは奪つように言われたんだ……。出来ればあんたとは穩便にことを運びたい。弟子をとる気まぐれもあるなら、差し出す気まぐれもあるだらう？」「全く勝手なことを言つ。……。悪いが、彼を渡すわけにはいかない。私には責任がある」

「司さん……」

思わず、じんとした。長身の男はさして残念そうなそぶりも見せずにやれやれと首を振つた。

「……わかつた。三日待とう。それが俺の中でも限度だ。その中で決めてくれ。争つて持つてかかるか、それもと普通に持つてかかるだ

か、だ

何とも勝手な交渉だつた。いや、それは脅しだつた。それだけ伝えると、男はまた風のようになえていった。……これが魔術師……？

「僕には、そつぱり現状が理解できないんですけど……」

「その割には冷静だね。もっとパニくるかと思つたんだが

「突然続きでしたからね……。慣れましたよ」

「そうか、それは心強い」

そう言つ司さんの額には僅かに汗が滴つていた。そういう僕も、唐突といつ名の出来事が通り過ぎ、安心と共に緊張が走つた。

僕が、狙われているという事実。

「彼の名前は神宮 修二<sup>かみや しゅうじ</sup>。私と同じ一級品の魔術師だよ」

……聞いたことのない名前だった。それもそうか。僕が知つている魔術師は司さんだけなんだから。

「神宮は世界と繋がる術を手に入れた男だ。 ハツキリ言つて

今の私では勝ち目はないな……」

「……そつぱり理解出来ません」

「以前、神の手の話はしたな……？ つまりはそれの全身バーションだ。差し詰め神の体とでも言おうか。彼は世界に繋がる部分を多くしたことにより、より複雑な魔術式を解くことを極めた男だ。世界に影響する部分が大きいため、彼の魔術は果てしなく強い」

そう言つと、司さんは手を上に翳し、パチリと指を弾いた。とたんに直つていくガラス窓。……魔術とは、便利だな、とのんきなことを思つた。

「それじゃ、司さんもそつやつて魔術を使えば良いんじゃないですか？」

「私が？」と司さん。

「私には無理だ。奴は奴の研究によつて己の究極を求めた。その結果があれだ。私にはそんな成果はないし、想像もつかない。一夜で出来るほど簡単なものじゃないんだよ。魔術は」

なんだかよく解らないけれど、複雑な世界であることだけは理解した。

「何故僕を狙つたのでしょうか？」

「……それが腑に落ちない点だ。何故真弥なのか……。甚だ疑問だ」

「司さんの弟子だからではないでしょうか？」

「……理由は？」

「つまり、司さんが何らかの研究をしていると仮定して、それは弟子である僕にも継がれると相手は解釈した。その結果、本人である司さんを捉えるより弟子である僕の方が研究結果を吐かせやすいと、そう考えたのではないでしょうか」

「司さんは、長考をした。

「……無きにもあらず、だな。確かにそう言った線もないとは言いつれないが、時期が早すぎる。お前が使い物にならないうちに知識だけ奪い去ろうという魂胆か……？ 駄目だ。現状で決めつけるには判断材料が少なすぎる」

僕としても、何を言つていいのか解らない。自分が狙われる理由……それは、もしかして記憶のことに関係があるんじゃないのか？「司さん、もしかして僕の記憶の事で関係があるんじゃないんですか？」

「即決は出来ない」

……考えれば考えるほどこんがらがる中、事実だけ、事実だけが残つた。それは、僕達には敵がいて、三日後には平凡な日常が敗れるのだと言つことだ。

「良いだろ。お前に魔術を教えてやろ」

そして、僕にとつても非日常の完璧な始まりの合図だった。

「まずは腕だな。腕をえ出来れば、概念に干渉しうることが出来る。真弥、腕を捲れ」

言われたままに腕を捲る。そこに冷たい感触が走る。司さんが何かを詠唱しているせいだろ？

「今お前に、概念に触れることの出来る手を作つてやつていい。世界に触れる印だ」

そう言つたと思えば、司さんはまた詠唱に戻つた。冷たい。唯ひたすらに冷たかった。冷たい感触は、あまり心地のいいもので

はなかつた。むしろ、吐き気を催す。……それでも僕は我慢するしかなかつた。……それが司さんのため、はては僕のためであるからだ。

司さんが数々の詠唱を唱える。そのどれもが耳に聞き覚えのない言葉なのかすらあやふやで、僕はそれを黙つて聞いていた。……冷たさは、周りを凍てつかせるかと思つたくらい冷たかつた。そしてそれもやがて終りを告げた。

「ご苦労。これで君も神の腕を手に入れた。……問題は使いこなせるか、だ」

司さんは一息つき、パイポを吸い始めた。僕はと言えば、儀式の終わつた右手をわきわきと動かしていた。……これが、神の手……？もう唯の僕の右手では、ないのか。あまりの呆気なさに愕然とした。

「神の右手は概念そのものだ。たとえ切り落とされてもその効力は落ちない」

「それは心強いですね」  
別名サイバーハンドと呼ばづ。

「使い方だがな……、世界は常に情報を排出している。その情報を掴み改变するのが魔術だ。まずはイメージしろ。右手を動かさずに右手を動かすイメージ。幽体だけが動くイメージだ」

言われるがままにイメージする。右手を動かすイメージ。幽体だけを動かすイメージ。すると不思議な感覚に見舞われた。

「なかなか筋が良い。そして今度は情報を掴むイメージをしり

情報を……掴む？とりあえず言われるがままイメージをしてみる。だけど、情報を掴むイメージングは全く出来なかつた。

「やはり躊躇いたか……」

「そりやあそうですよ。一夜でできないのが魔術なんですから

そつくりそのまま彼女に言葉を返す。

いや、解っている。私だって苦労した。君も苦労するはずさ」

……司さんが苦労するところは、想像できなかつた。

相変わらず腕を動かすイメージをする僕。……これは、出来てしまえば簡単だつた。不思議な感覚だが、次第になれる。第二本目の腕を動かしている気分だ。試しに、グラスをその手で握つてみた。

その瞬間、腕から布<sup>ハタ</sup>気が云ひつた。

「うう……わあああああああああああああああああああああああああああ

「ああああああ！！！！！」

「馬鹿、止めやー。コラフとこう概念に惑わされるなー。おまえの腕はガラスじゃない、コラフでもない！ お前の腕はお前のものだ！」

進藤  
司さんが叫ぶ。

その言葉の通りに俺の腕をイメージする。そうすると、概念通しがくつ付いていた錯覚は消え、そして腕だけが残つた。再度イメージする。今度は確固たる意志を持つて、これは腕だと自覚した。  
そして、コップを握りしめた。

「概念崩しだ」

ほ、と息を吐く、やつはさんだ。

## 概念崩し？

「要するに力技を持つて無理やりコップをねじ伏せたのさ。行きすぎたエネルギーを与えることによつてその物体を破壊する術だ。」  
「今まで世界に繋がるといつことがどういうことかは理解したな？」  
概念で武装しろ。文明で身を守れ。そして、その腕を持つて改編

するんだ」

その言葉は、とても重要なもののようを感じた。その日一日は、公園へ行くこと無く、いやこれから二日間、公園へ行くことなどあるまい。ずっと魔術を司さんから学んだ。敵、その存在を意

## 敵、その存在を意

識しながら、不安な夜を過ごすのであった。

新しい日常は、過激だった。司さんいわく、これからは何をするにしても右手のイメージを忘れるな、と言っていた。それから僕は右手を概念で守りながら色々なものに触る練習をしていた。敵は待つてくれている。この事実だけが僕らの救いだった。正直僕がたとえこの数日である程度の魔術に長けようが、それはあまり意味のない行動なのだろう。そしてその疑問は司さんに言つた瞬間、その通りだと肯定された。僕は第一の右手を動かす。……動作は前よりよっぽどスマーズになつた。物を持つてもそつちの概念に引っ張られることも少なくなつたし、なにより今の僕にはこれしか武装がなかつたから、どれだけ進歩しても、まだ足りないくらいだった。暇があれば僕は腕を動かしたし、暇がなくとも僕は腕を動かし続けた。……そのうち気がついた。この第一の腕は、疲れを知らないと。

「司さん、この腕つて疲れないんですか？」

「ああ、物理的な実態がある訳ではないからな。言つただろう？」

概念だと」

……司さんの説明はいつもよく解らない。まあ、それはそれとして置いておくとしよう。魔術師としての正式な修行といつていいのか解らないが、そんなことを始めての一日目、僕は百枚の紙を渡された。

「これらの紙を如何なる手段を用いても構わないから十枚やぶけ。正し使えるのは神の手のみだ」

そう言い渡された百枚のうちの十枚は簡単だった。紙という概念に触れ、それをやぶくといつのは単純作業だった。……しかし、次が厄介だった。

「今度は残り九十枚を黒く染めろ」

「黒く……ですか？」

「そう、黒くだ」

言わされたままに紙に手をあて概念を読み取る……。読み取るのは

良いけれど……これから何をしていいのか全く分からなかつた。

「魔術は方程式を見極める。方程式を改編するのは常にイメージしなければならない。紙は元からこういう色だったのだと、自分の中で概念を作りだすんだ。それが紙に反映されればクリアだ」

言われたままに、眼を閉じ、概念に触れ、イメージをする。それは容易な作業ではなかつた。

この紙はもとから黒かつた

。

艶のある黒

混沌の原色

果ては夜のイメージ

司さんと初めて会つた公園……

そうして、今までのありとあらゆる黒という印象を紙一枚にぶつける。眼を開けると、そこには灰色がかつた紙があつた。

「やれば出来るじゃないか

「へへ……」

それは初めて魔術というものを成功させた瞬間であつた。

「だがまだ黒にはイメージが足りない残り八十九枚、頑張るんだな」「はい……」

それから三日経つのは早かつた。来る日も来る日も僕は紙の課題を出されて、本当にこんなことばつかやつていいのだろうか、と思うようにもなつていた。仕舞に僕は、また紙ですか、と呟くようになった。一日目からだ……。一日目の終わりにさしかかった頃、紙は完璧な真黒になつた。それからは紙の課題を出されるどころか、他の課題すらでなかつた。これで良い、と彼女は言つた。

「元から護身用程度に身につけさせたかったものだ。さして役には立たない

「……でも司さんは彼には勝てないと言つ。僕はビリなんじょうか……」

「愚問だな。自分の身一つくらい、自分で守れ

当たり前で、辛辣な言葉だった。

三日目が終わり、日付がちょうど変わった頃、長身の男は、現れ  
た。

「心の準備は出来ましたかい？」

なんとも興味なさそうに言う。魔術師とは總じてそう言う人種なのだろうか。そう言えば、僕の身近な人間とは、ほぼすべてがそう言つた人種であった。

「ああ、決めたよ。君とは対立することになりそうだ」

司さんがそう言つ。それと同時に一人は魔術を詠唱し始めた。そして僕は全力で逃げた。

それは約束事だった。

「いいか？ 私が詠唱を始めたら、君はすかさず逃げる。足手まいになる」

「でも、それって……」

「良いかから逃げる。守つて戦うというのは辛いことなんだ」

そして僕はその約束通り、全力で逃げ出したのだ。

下弦の月が照らす夜、一人の魔術師は対峙した。対峙した場所は彼女の住む家より離れた、寂れた空き地であった。子供の喧嘩じやあるまいし、と長身の男、神宮は呴いたが、そんなことどうでもよかつた。

「さあ、始めようか」

男は待ちきれないと言つた様子でそう呴く。一方女はと言つと、何の感情もこもつてない声で一言、いいだろつと呴くのみであった。

「一つ聞く。何故彼を捕まえなかつた」

それは当然の疑問。

「簡単なこと。お前を倒した後から俺が捕まえるからよ。そして彼にとつてそれは愚問であつた。

「見くびられたものだな……」

風が、吹く。それを合図にお互い魔術詠唱を始める二人。

「 詠唱中は無防備になる。それをお互い知つてはいるから下手な攻撃は出来ない。そう判断したのは神宮だった。しかし進藤はそれを見通してか“神の手”で反撃を繰り出した。それは、詠唱と同時に二つの概念を動かすと言つ哉哉。

「 ちつ

神谷は舌打ちをし、詠唱をキヤンセルし、その腕を自らの腕で弾いた。そして一寸早く済んだ進藤の詠唱は魔術と昇華し、彼の敵を襲うのだった。

飛び交うは二つの炎。ストレートコースで時速は有に五百キロ出ていたであろう火の玉を、神宮は何時かの如く避ける。しかしそこに意味はなかつた。

「追尾だと……」

男がその違和感に気がついたのはその時だった。進藤 司の詠唱が一つではないと気がついたのに。進藤 司は間違いなく一つの口を持つていた。だがそれは二つではない。

しかしそれを、二つ同時に詠唱を可能にしたのは、一重に彼女の才能が凡人を遙かに上回るものだつたからだ。

歩が悪い……。彼はそう思った。スピード勝負ならば確実に彼は負ける。

(このままじやジリ貧だし)

火の玉の追尾を避けながら、考える。いつの間にかそれは小さな空き地なんて舞台を踏み出し、もっと大きな街と言つ舞台へ移行していた。

そして陰る月と共に彼は消えた。消えた彼を追つて炎が迫る。し

かし目標を見失つた二つの炎はお互いにぶつかり合い、相殺されてしまった。それに相次ぐかの如く綺麗な詠唱。司の第一射だ。それは真空であった。しかしターゲットを見失つた真空は唯そこら辺にある街頭をたたつ斬つただけだった。

（しまつたな……）

視野が悪くなつてしまつたことに気がついた司。

そして闇に乘じる神宮は、完璧に司の隙をついていた。

その時神宮は完ぺきに司の背後を取つていた。一瞬のチャンス。彼は右手を振り上げ、司を仕留めようとする。それは無駄のない迅速な動きだった。

「

しかしそれは司の詠唱により、その右手が司に当たることはなかつた。詠唱中は無防備になる、そのことを神宮は知つていた。それでも手を引き、身を引いたのは、本能が危険を告げていたからだ。そしてその予感は当たつていた。

瞬間煌めく閃光が司の背後を走る。司の詠唱の結果だ。

……それからの戦いは、まさに激戦だった。

司が一歩歩けば、その分神宮も一歩動く、そんな状態。それは持久戦といった。

火の粉が散り、風は舞い、真空が走る。それは神秘的な舞だつた。神宮は強烈な一手を 繰り出す。司はそれに対し一手を持つて対処する。そこに隙など存在しなかつた。

「なるほど。噂通りの魔術師だ」

「噂……？ そんなものが私に定着していたのか」

「ああ、人はお前を天才と呼んでいるんだぜ」

「ありがたくない言葉だね」

本当に有り難くなさそうに、司は答えた。実際そうなのだろう。

月が姿を露わにする。……それと同時に異変を感じたのは司。気

のせいか、神宮が霞んで見える。いや、それは錯覚ではなかつた。

「俺の魔術は知つてゐるな？」

「体の大部分を概念と化し世界と溶け込む……。まったく、君の方が天才にふさわしい。もつとも、君のは力技だがな」

そう言つて、司は右手を概念へと変化させ、ありとあらゆる概念を改編した。そして彼、神宮も同じことを体全体で行つた。どちらが浸食率が高いかは、一目瞭然。……神宮だ。ただ司もそんなことはわかつていた。だから司は“詠唱と共に”右手を使つていた。それは司にとって基本であり最終手段であつた。同時に一つの概念を操るという高等技術は、奇跡の技とも言えた。それでも、世界は彼、神宮を優遇した。否、彼が世界を効率よく利用していた。

そして、お互の技が炸裂する。

「展開……」

眩きと共に、司のまわりに無数の氷の矢が、数千本の氷の矢が現れた。対して神宮の周りには、無数の刀が現れていた。

「まさか……、そこまで具現化出来るのは……」

割に合わない、と司は心の中で眩いた。氷などの空気中の水分に干渉し、召喚する司の技とは違い、刀などという具体的な具現化には、よほど世界に浸透しなければ出来ない芸当だつた。それは、イメージの書き換えに等しい。

「行くぞ　！」

その一声と共に行きかう刃通し、ぎん、ぎんぎん、とお互に相殺しあう。その間お互いの魔術が崩れないよう詠唱でカバーしあう二人。それは、美しい歌の旋律のようにも感じられた。

ソプラノとアルトの掛け合いは、しかしアルトの勝利に終わるのだった。

ぎん、ぎん。と金属音が消え、最後にずぶりという厭な音が聞こえた。……司の敗北の瞬間だつた。

「僅か一本の差……ねえ。流石天才だ」

そう、敵に称賛を贈り、倒れる彼女を見送る彼。ぐふ、と血と密度の高い空氣を吐き出し、また聞き心地の悪い音を奏でる司。司は、倒れた。

その結果だけ見たら、彼は本来の目的に戻ることにした。

そう、三木谷 真弥を捕えることである。

僕は悟っていた。進藤 司は神宮には勝てないと。それは短いながらも付き合いで把握した事実であった。……だつて彼女は本当に大事なことに対する嘘をつかないから。一流の戦いには、一瞬の隙も許されない。でも人間の受け流せる許容範囲などたかが知れない。きっと戦いは一瞬で片がつくのだろう。それは、自分が分析した結果であつて、事実とは異なるのかもしれないが。

「兎に角、今は走れ……」

自分に言い聞かせる。どれだけ無駄な行為であろうと、彼女がくれた時間、無駄には出来ない。……否、無駄な行為などはない。自分に許されたのは、走ることのみ。

そんな時、一人の少年と出会つた。

「真弥つ？！」

その声に反応してそつちを見ると、その少年とは最初、始まりの学校で出会つた、あの少年、名前は確か 佐藤 和彦であった。

「和彦だっけか？」

「あ、ああ、……どうしたんだよ、突然転校なんて……」

「転校？」

ああ、そうか、学校ではそういう扱いになつてているのか。  
「詳しいことは語れないんだ。その……親の都合で……」

「……記憶喪失だから？」

「信じてくれるのか？」

いいや、と首を振る彼。

「だけど、……何か真弥らしくないから、信じてもいいかなつて……、その……ごめん」

どうやら学校での出来事で彼なりに困つていたらしい。悪いこと

をしたな、と今更ながらに思つた。

「……ああ、そのことは良いさ。それより俺今変な奴に追われてるんだ、匿つてくれないか？」

「え、それは大変だ！ じゃあ家にきなよ……！ すぐそこだからそれは有り難い提案だつたが

「すまない、やっぱり出来るだけ遠くに逃げたいんだ。車かなんかで、もつと県外とかに……」

「 それも記憶喪失のせい？」

胡散臭そうにこっちを覗き見る和彦。……確かに、関連性も突拍子もない話だ。県外だなんて、自分でも愚かなことを言う。国外とでも言つておけばよかつた。そうすれば国が魔術師を管理しているから下手に動きは出来まい、と思うし。

「ああ、出来るだけ遠くに行きたいんだ

「 ……解つた。目的地は問わないよ。バイク持つてくる。実は僕、中型の免許持つてるんだ」

そう言いながら彼はこっちこっち、と手招きをする。そしてついた彼の家で待つこと数十秒、ぶるぶると激しくエンジン音を鳴らしたバイクと彼が登場した。

「さあ乗つて」

言われるがままに乗る。それと同時に

「見つけたぜ小僧」

と声がした。

振り返るとそこには神宮がいた。……そうか、司さんは負けたのか……。そう、他人ごとの様に思つた。でもその意味しているであります場所は、とどのつまり、死、であつて。僕は暗い思考の渦に巻き込まれてしまった。 司さん。優しかつた人。でも、思いだそうとすればするほど思い出は淡泊になつてゆき、どうしても他人事のようにしか思えなくなつてしまつ。……所詮、他人の死であることに変わりはなかつた。 それが、そう割り切れてしまつ

自分が悔しかつた。

ぶるるん、と再度呼吸をするバイク。それと共にバイクは走り出すことはなかつた。一瞬で検討がついた。魔術だ。

「あれ、あれ、……？ どうして……？！ 早く逃げなきゃいけないのに、くそつ」

最終的には友達はバイクを降りて、神宮へと向かつていつた。

「お前が変質者か」

そう言いながら殴りかかる。びゅん、と跳ねる右手。しかしその手が届くことなく彼は倒れてしまった。なんてことはない。唯の肉体技だった。

「惜しかつたな。流石に俺もバイクで逃げられちやあ、追うのに時間がかかつちまう」

……それは決して厭味ではなく、純粹な、心からの発言であることに間違いはなかろい。

「僕を連れて行つてどうするつもりだ……」

男は大袈裟な素振りをして言つ。

「さあな。向こうさんと考えることなんてさつぱり解らない。場合によつちや、殺すぜ」

最後の一言、殺氣を強く感じた。……おそらく本気なのだろう。それでも僕は……、いや、おそらくそれは義務。抗わなければ、司さんに申し訳が立たないし、……和彦にも、何か悪いし……。精々抗おう。それは軽い気持ちだったのかもしれない。

概念上の右手を動かす。

「お、流石弟子と言つたところだな。だがそれは蛮勇だぜやめとくな」

空氣に干渉する。そしてイメージする。氷の剣を……。水分を集めて……凝結させて……イメージを持つて固定する。その間、相手は唯見ているだけ。僕にとつてこれは初めての魔術行使。それを見守るかのように、彼はじつとしていた。

そして、剣は出来た。

「御見事。上出来じやないか。司の数千分の一程度には上出来だ」「その名前を口に出すな……。お前が言つと気持ち悪くなる……」「言つねえ……。でもそんな剣一本で何が出来る？ そんなんじや、魔術を使うまでもないぜ」

それは好都合だった。使われたなら、間違いなく僕は殺されたいたからだ。かといって、現状は一向に良くならず。まあ、言った通り、僕は司さんの数千分の一なのだろう。

「多分僕はあなたに敵わない」

「解つてゐるじやないか……。おとなしくついてくれば、別に悪い様にはしないぜ」

「それは無理だよ。……何故なら、そんな間抜けな人間を司さんは好まないからだ」

……好きだつたよ。司さん。貴方と言つ人間は、僕にとつてかけがえのない友人だつた。一瞬だつたが、記憶をなくした馬鹿に生活を与えてくれてありがとう。でも、それも一瞬の夢だつたね。

駆ける。切りつける。いなされる。それでも再度切りつける、受け流される、切る、受ける、切る、流す、切る、……当たらぬ。

僕の体は、こんな単純な動きで摩耗した。……予測通り。僕は勝てない。それでも、又再度同じ作業を繰り返す。切る、受け流す、切る、流す、切る、切る、受け流す、切る、切る、切る、受け切る、切る、切る、切る、受け流す、切る、流す、切る、切る、切る、受け切る、切る、切る、切る、……一向に当たらない。

「なあ、いい加減あきらめたらどうだ、と！」

彼からの強烈な蹴りだつた。……それを腹にもろに受け、思わずその場に屈み、嘔吐する。

「「」ほつ「」ほ、「」ほ

駄目だ。僕じや数分も持たない……。司さんの数千分の一？

数億分の一の間違いだろ？

「なあ、どうしたらあきらめてくれるんだ、と

更に強烈な蹴り。胃酸が吐き出る。どか、どか、どか、どか、どか、と確実なダメージを僕に与えるそれは……そのうちBGMへと変わり……、安らかな眠りを幻想させた。夢が現になるように……、不思議な感覚だった。 情報が世界を満たす。いつかの如く幻想は昇華する。

気持ち悪いものが、頭を支配する。白黒、反転する。それに坦うように、夜は深みを増し、全体をブルーで染め上げる。地面から何かが浮き上がる。それは文字にも見えたし、あるいは根本的な何かの様な錯覚もする。その時唐突に理解した。これら全ては、方程式なのだと。

がしり、と蹴りを受け止めた。火事場の馬鹿力ってやつだ。それは脳をフルに活用することによってなせる現象。

「いい加減、痛いぜ……」

呟く。 おもむろに上げた顔。視界にまとわりつく式の数々。

それらは確実に概念であった。

「見える……」

更に、そう無意識に呟いた。

「見える ？ あの世でも見えたのか？」

馬鹿が勘違いをする。

以前、司さんが言っていた。

我々は干渉することは出来ても、概念を見ることは出来ない。概念を見る、汲みとると言う行為は、脳が世界に干渉するということだ。それに耐えうる脳は未だかつてないし、それに誰もそんな神様の眼を持つことは許されなかつたのさ。

「司さんも、嘘吐きだ……」

なんてこと、自分には確実にそれがそうであると理解してしまつた。今まさに自分が見ているもの、全てが司さんの言つ概念であるということに。 式が見え、そしてそれらを容易に理解することができた。 。 憂い……。

概念である右手を空気中の情報にかざす。そして軽く式を捻じ曲げた。

それだけで相手の周りは真っ赤な炎に包まれた。

「……。そんな芸当ができるとは、意外だな」

男が声を上げる。

その声すら、情報が見える。ありとあらゆるものに情報が見える。

世界は情報に満ちている。情報を理解することが、世界を利用することに繋がる。つまりは、自分に利用出来ないものは存在しない。眼は常に概念に繋がつていた。今俺は世界の視点で周りを見ている。今の俺ならば、不可能はほぼない。……もつとも、それは魔術的な意味において、だが。

「あ」

試しに声を出してみる。面白いことに共に情報が排出される。“あ”というものに込められた意味。それらが出現した。そしてそれは方程式で出来ていた。……声すらも、今は情報として現れる。

俺は、取りあえず、全力で後に飛んだ。人間がハイになつたとき、どれくらい飛べるかはしらないが、俺の脳みそは今リミッターを外してから、ゆうに五メートルは後に下がつた。一気に出来る間合いに自分で驚いた。

「おおよそ、人間業じゃないな……」

それは矛盾。人間であるうちの限界の技であることは確かだ。唯それを俺が行つことが、異常だった。

「へえ……、なんだ、そんな力を隠してたのか……。なら、少しは楽しめそうだな。ああ、そうだ、今のうちならおとなしく安全につれていつてやるが、どうする?」

そんなの愚問だった。

「断る」

それが、戦闘開始の合図。俺は右手しか、この世界に影響を「え」る手段を持つていない。司さんがくれたこの腕……。これで屠るということが、大事だった。あくまで眼は、概念を捉えるだけ。途中式が見えるだけ。

相手が魔術を詠唱する。

「

それを情報としてとらえ、俺はその魔術式を未完にした。

つまり、右手で途中式を改編した。イコールとして無となる結果へと導いた。それは、完璧に概念を捉えているからこそ出来る筋道。魔術は一方的な押し付けがましい行為だ。それは、科学がそうであるかのように。世界といつも黒いブラックボックスに式を当て嵌める博打。でもそれを完璧に把握したなら……。式は簡単に崩壊する。

「な……に？」

相手が唐突に声をあげる。魔術が発動しないという事実が彼を震撼させた。なら、もう一度とばかりに、再度詠唱をする彼。

「

そしてそれをたやすく解きほぐす。トランプのタワーを崩すほど簡単な作業だつた。

「何故だ……何故だ、何故だ何故だ！」

苛立ちは葛藤へと変わる。原因不明の魔術不能。その事実が彼を苦しめた。これで、ファイフティ、ファイフティ。立場は五分と五分だ。なんてことはない。お互いこれで普通の人間だということだ。魔術は俺が解きほぐす。詠唱中は無防備になるから。

「なら……これで……」

彼の体が世界に溶け込む……。これが尊の、神の体つてやつか……。でも、神の目は無い。体が世界と共に溶け合い、方程式と化す。そして俺は……それすらも解除する。概念の右手で。

「何故だ……何故、世界が拒む……」

「さつきからぶつぶつと何言つてやがる」

「……何故……まさか、お前が？」

「……」

返事はしない。唯代わりに、彼まで歩みより、全力で殴つた。その際、概念上の右手で、確実に彼の体の式を捻じ曲げた。魔術の行使出来ると叫う体の式を、強制的に元に戻した。それは死の宣告。

……しかし意外だった。それは拳が当たったこと。彼の身体能力なら、確実に避けただろうに……。しかし、それには理由があるこ

とに、僕は数舜後に気がついた。……それは、僕の後に。

「『苦労だつたな、真弥』

唐突にそんな声が聞こえた。それは、聞きなれた、それでいてやわらかく温かみを帯びた声だつた。

「司さん ！」

「ああ、待たせたな。傷の治療に時間がかかつた」

そんな彼女の存在が、彼にとつて硬直状態として現れたのだろう。「ここからは、私に任せてもらおうか」

「司さんが？」

「どうせお前、じゃ勝ち田はないだろうしな。殴れたのが奇跡だ

「……そうだね」

至極当然のことと言つ彼女。そう、殴れたのが関の山だろう。これ以上望んだところで意味はない。

「……何故、世界が……」

一方片割れの魔術師はいまだにそんなことを呟いていた……。「おい、説明しろ、奴はなぜ壊れている」

「……まあ

さつぱり理解出来なかつた。

「今のアイツじや、殺してくださいと言つているようなものだな」「殺していいんじやないですか？」

人としては、まず間違つた意見を言つが、奴にもらつた蹴りの事を考へると、非常に不愉快なものが頭を支配する。それは単純に苛立ちだつた。怒氣で人を殺せたなら。

「行くぞ、神宮」

「

合図と共に魔術を詠唱する司さん。一方無反応な神宮。

本

当に、処理つて形になりそうだ。終わりは目に見えて解つていた。神宮は、死ぬだろ。

司さんの手のひらから氷の剣が出現していた。そしてゆつくりと神宮に近づく。

「神宮、お前がどうしたのかは知らないが、死んでもらう。安全

の為にな

それは滅ぼさなければ自分の存在が危うくなるもの。

敵 敵  
それは仕留めなければならないもの

敵 敵  
決して相容れないもの

敵 敵  
それは自分自身。

「真の魔術師とは……なんだ？」

最後に神宮は呟いた。それは絶対的に自分が届かない何かを見せられて、落胆を通り越した、そう、挫折を連想させた。

ざしゅ、と嫌な音が響く。それは巨大な刃が、胸を貫く音。誰の？ 神宮の。それは確実に心臓を貫いていた。あたりがざわざわと騒ぎ始める。風が彼の死を慰める。しかしそれは大きなお世話であつた。

「色々、大変なことになつてているな」

司さんが呟いた。それもそうだ。近くには倒れている和彦、死んでいる神宮、衰弱しきつてている僕。あたり一面は何故か、ちりぢりに焼けていた。

「処理は私がしよう。君は帰つて休みたまえ」

そう言つて、進藤 司は僕に近づき、軽く唇にキスをした。

一瞬、思考が停止する。どういった意図でしたのかは解らない初めてのキス。それは、少し悲しい味がした。

「何故私が氷の刃で刺したと思う？」

唐突に彼女は問いかける。

「氷は溶けてなくなるから……かな」

「……その答え、採用させてもらおう」

最後にそんな言葉遊びをして、俺は帰路についた。自称魔術師は、おそらくこの程度のことであるなら処理出来るのであらう。さして心配することもない。真夜中になりつつある道を歩く……。本当に、アーヴィングは残らなくて良いのだろうか？ 唇の後をなぞる。とて、とて、と歩く音だけが響く。

気まぐれからだ。

僕は楠公園へと向かった。

脆弱な世界観。僕の主觀では世界はちつぽけで、弱すぎる。そんな世界の真つただ中、僕はボツリとベンチに座つていた。いつもいるはずの相棒犬キヤースはいない。

「来てしまつたか」

突然、暗闇から声が聞こえた。この声は……楠さん。

「楠さんか？」

「ああ」

徐々に露わになるその姿。……それはベンチの後からだつた。それを確認したと同時に、俺は前を向きなおした。……単に首が疲れたらからだ。

「こんな時間に出歩くのは感心出来ないな」

「……そのくらい許せ」

「まあ、俺がいるつちは安心か……」

「へえ。お前つて頼れる人間なのか？」

「人並みにはな」

「残念だが……却下だ」

ぶつり、と何かが首筋に刺さつた。反射的に動こうと思つたが、その反射運動が全く効かなかつた。

「何を……？」

「神経が麻痺する毒だよ」

冷静な口調で物凄いことを言つた。

「ど……く……？」

声まで出なくなつてきた。それを確認すると、彼女はおそらく持つてゐるであろう注射器を抜いた。どういふことなのか……さっぱり理解できない。

「良いことを教えてやる。楠はな、管理者だ。管理者とは、国が

魔術師を管理する際、宛がう役職の事だ」

そこまで聞いて、俺の意識は 落ちた。

目が覚めたのは暗い牢獄のよつた場所で、ゲームとかにありがちなランプが俺の閉じ込められている一室に置いてあるだけだった。ランプの色はオレンジに近く、周囲もオレンジを中心照らされた。俺はそんな部屋の中心でクッショーンの上に座っていた。……はつきりいって居心地の悪い空間だった。そんな空間でまず俺がしたことと言えば、完璧に幽閉されているかどうかの確認だった。

薬物のせいでピリピリとする体を動かして、一か所一か所出口がないかを確認する。……、結果はノー。全くと言つていいほど出口がない。入口すらない。嵌められた鉄格子に隙間はほとんどなく、向こうに人がいるのか認知するには多少不便だった。

「一体どうやって閉じめられたんだ……」

そう思い、上を見ると、天井にとてつもなく大きな穴が広げられているのに気がついた。きっと上から放り込んで、クッショーンの上に落としたのだろう。……上ることは無理そうだった。

「あのがきが……」

「誰がガキだつて？」

唐突に声。それは俺を幽閉した張本人、楠 楓の姿だった。

「早速だが、どうして俺を閉じ込める。俺は何かやつたか？」

「お前は司という魔術師の弟子になつてしまつたようだね。その所為さ。司は不穏分子だ。その司が弟子をとるなどろくなことが起こらない。そんなこと楠では見逃せなかつたのさ」

「お前、楠の家に随分順応してないか？ 俺の知つている楓はそんなことはしない」

「それとこれとは別件だ。代々楠は魔術師の管理をしてきた。それに私は異論はない。……唯、眞弥が弟子になつてしまつたこと

がショックでたまらない。いや、知っていたんだ。最初から

「つまり、最初の出会いは偶然じゃなかつたといつことか。……三者面談とか、学校にいにくいとか、そういうことじやなくて、ただ単に俺を見張つてただけだつたのか！」

「……すべて嘘と言つ訳ではないが、……ああ、そうだな。ずっと

前から知つていた。君が記憶喪失になつて彼女に拾われたあの夜から私はお前を見ていた」

「そりや随分前からだな」

「ああ、そうさ。会う度良心が傷ついたよ。君は、好きだつた」

「同はどうしている」

「彼女は当面は放置だ。弟子を預かつてはいるといつ手紙は出したが、同時に弟子に手を出すと國から狙わされることになると脅しておいたからたぶんこないだろ？。これで君は、私と一緒にだ」

「なるほど。確かに同なら来そうにもないな。なら自力で脱出する概念上の右手を取り出そうとする。その直後、俺は落胆をした。

「……？ 右手が……ない？」

「悪いが、その右手はこつちで中和させてもらつたよ。君の右手は普通の魔術師がつけているものとは違つて、刻印と言つ名の寄生虫を宿らせることによつて出来る疑似的な右手だつたのさ。つまりは、偽物つてこと」

「……なるほど。確かにあの儀式はあつさりしすぎていた。違和感があつたのは、気が付いていたが。しかし、だ。

「都合が良くないか？ まるでこつちのことなど全てお見通しつて感じじやないか。それに、何故右手を中和出来た？ それじや魔術師みたいじやないか」

そういうと、彼女はくすりと笑つた。

「勘違いしているな。 国が管理しているからつて、管理者が魔術師でないとも限らないだろ？ 確かに私達みたいのは少数派だがな」

合点がいった。

高確率で俺は逃げられない。

「……このことをお見通し？　ああ、それは神様の皮肉つてやつだよ。言つただろ？　君は最初から監視下にあつた。その理由は単に司の弟子という理由ではない。君は、三木谷は楠の分家なのだよ……なんだつて？　楠の分家？」

「君には魔術の素養があつたのだよ。三木谷は優秀な魔術師の家系だつたからな。だから記憶喪失の時には真つ先に楠に連絡があつた魔術師の家系。それは驚きではあつたが、自分にとつて何故か当然の様な気がしていだ。本能が、理解する。

「……理解した。だが司さんは家を訪問したらしい。その時になにもなかつたとは思えないが」

「司は三木谷の名前を知つていた。何故なら魔術師とは少数派の人間で、少数派を覚えるのは簡単だつたからだ。君を引き取ろうとした理由は解らないが、彼女が三木谷の家を訪ねたときなにもなかつたとは思えないな。にも関わらず、三木谷はそれを許容した。解せないな」

俺にはそれが、すぐに検討がついた。

いつかの記憶を掘り起こす。

「ああ、そうだ。君の親御さんとも話はつけたよ。学校にも。この書類はそういうことにに対する証明書のようなものだ親は……居たのか？」

「あまりにまぬけな質問。でも、泣きそうになる。俺に親がいたと知つたと同時に、決別。……脳がついていかない。親との決別……、国が魔術師を許容していく、良いように扱つていて。そして、僕が司さんの、弟子？」

「ああ、いた。ちなみに君は一人暮らしだつたよ。色々こたごたはあつたが、そこは語りたくないね」

暗示とは、内側に秘めている優先順位というものを

引き出す手段の一つだ。人間は願望に満ちている。たとえば、お金持ちになりたい、死にたい、等。後者は自殺願望と言つた。その一つにこの家に住みたい。働きたい。元の家から家出したい、等があるとしよう。暗示と言つのはそれらの願望をより強くしただけに過ぎないのだよ。君は例え暗示にかかつていても、自分の意志でここに居るのに違いないのだよ。ちなみに、自分の意志を全く無視した選択をさせることを、洗脳と言つ

つまり司さんは、両親に洗脳を使つたと予測できる。『たごたとはそのさいあつた争いか何かのことだろ』。全く乱暴な人だ。そう、俺は思った。

「三木谷は記憶に関して優れていた魔術師だつた。君の記憶に障害が起つたのも魔術が関係してゐるおそれがある。ただまあ、こちらにむりやり引きずり込もうとしたのが悪かつたのか、神宮を仕向けてたのは色々な意味で失敗だつた。それに彼が死ぬことになるとは、思わなかつたし」

「情報が早いな」

「ここいら一体を牛耳つてゐるのが楠だ。皆それぞれ、街の住人は魔術師通しの争いを許容するという暗示にかかつてゐる」

誇る訳ではないがな、と彼女は次いで言つた。

そこで会話は途切れた。……聞くこともなくなつたからだ。

「さて、俺は一体どうすればいいんだ？」

「……記憶を取り戻したいのならば、楠の力で取り戻させてあげる」

「へえ……そんなことが出来るんだ」

「やつてあげましようか？」

「御免だね。俺は今を気に入つてゐるんだ。いらない過去なんて邪魔になるだけじゃないか」

「もう、遅い」

「そう彼女が咳くと同時に、頭痛に見舞われた。

「何をする……」

「あなたの最下層の記憶を取り戻させてあげる」

そう、何の感情もこもってない声で彼女はそう言った。

全

く、魔術師といつやつは、そうじてこういう人間なんだから

本日何度も目かの気絶は 、 そのどれもより強烈な頭痛と共に陥つた。

体が徐々に覚醒へと近づく。それと共に脳が目覚める。否、

それは完璧な目覚めだった。脳の容量の半分以下しか使っていない  
という人間の領分を遙かに超えている。それはほほポテンシャルの  
全てを使っているという状態だ。それは快感だった。高速道路を三  
百キロくらいで走っている感じ。 世界が情報に満たされてゆ  
く。水のように途方もない情報の源を片つ端から脳みそは認識しよ  
うとする。 「ツップから水が溢れるみたいで、なんだかそれは  
凄く勿体ない事をしているような……、ひどく、後悔した。

「目が覚めているのか……？」

唐突にそんな声が聞こえた。

「ああ、どうやらそうらしい」

口が勝手に走る。僕の意識レベルで出来る芸当じゃない。いや、  
僕じゃない。総合して僕と言う自我があるだけで、僕という部品は  
沢山ある。僕は、総合的な僕はそんな部品の代表者でしかない。つ  
まり、今喋っているのは僕であり、僕にあらず。そこまで考えて、  
意識は吹き飛んだ。

「君は……真弥なのか？」

あの妖艶とした女が喋りかけてくる。口調がずいぶん違うが、恐  
らくはそれが本来の彼女なのだろう。

「どうかな……。君こそ何者だい？ そう言えば名前すら知らない  
そう俺が尋ねると、彼女は一寸戸惑い、やがてそれを忘れるが如  
く、こう答えた。

「私の名前は進藤 司。魔術師だ」

それはおおよそ自分の理解の範疇を超える答えた。

「私は答えた。なら君も答えるのが道理じゃないかね？」

そう魔術師は答えた。

「…… といつても、自分自身が何者かなんてこと、俺にはさっぱりわからなかつた。当たり前のようになに存在する自分に名称を与えるのだとすれば？」

「総合して三木谷 真弥と言つ自我があるだけで、三木谷 真弥という部品は沢山ある。真弥は、総合的な真弥はそんな部品の代表者でしかない。つまり、今喋つているのは真弥であり、真弥にあらず」そこまで言つと、彼女は驚愕といった感じの表情を浮かべた。

「君は…… そうか、では、君は真弥でいうところのどの部品である？」

「一つづつ咀嚼してから、魔術師は言葉を選んだ。

「 脳だ」

「 ははつ、それは面白い。つまりは本体か」

魔術師は笑う。その笑い声は、本当に笑っていた。何の色もないが、確かに笑っていた。 それがひどく不快だった。

「ならば本体、いや脳だったな。脳である真弥に問う。お前の記憶だ。脳であるなら解るだろう？ どこへいつてしまつたのか。記憶の最下層か？」

「記憶など 元より無い」

「無い だと？ 馬鹿なことをいうな。脳の容量を馬鹿にしてはいけない。忘れるという行為はあれど、失うことなど万に一つもありえない」

「では逆に聞こう。 脳の容量以上のものを受け入れてしまつたなら、どうだ？ それはコップの水があふれるのと同じ。失うしかないだろう」

彼女の瞳が丸く開かれた。

「まさか……。三木谷が魔術師の家系であることは知つてゐる。だがしかし、だ。それは大昔の話。今は専ら機能してゐるのは本家で

ある楠だけだ。

魔術でも脳といつのはそつ簡単には潰れない

ものだ。君は 突然変異か？」

楠 、三木谷

、どれも耳障りだ。俺が俺である以上、

奴らは関係ない。

「突然変異 ？ ああ、それは言い得て妙だ」

「ふん……。認めるのか。なら君は記憶を代償に何を手に入れた」

。

「言つならば、変質した、いや、完璧なideaだ」

「idea……？」

「永遠不变で、完璧な物質の情報の源。 世界とは様々な方程式で出来てゐる。その方程式を見極めるのがideaだ。または式そのものではなく、イコールまでの過程を見るに意味がある。つまり、だ。 僕の眼は物事の概念を捉えることに特化した」

そこまで言つて魔術師ははつとする。

「 なるほど。勿論、プラトンが説いたidea論とは異なるものだろうが。 神の眼か。いや、まさか 、ついに現れ

たか、とんだ化け物が」

くつくつと魔術師は笑う。 やはりその声は不快だった。

「ideaを受胎するその過程は俺にはわからない。 それは唐突だつた。しかしその結果俺の脳の大半はideaというソフトに持つてかれちました」

「結果、記憶喪失、か。しかしそれはまさに喪失だった訳だ」

そういうこと、と相槌を打つ。

「しかし不味いことになつたな。 そんなことがばれれば国が黙つちやいな」

「国が ？ 何故」

「ああ、詳しいことはのちのち説明するとしよう。 君は危険な存在になつてしまつたということだ。魔術師が求める究極に最も近い存在と言う訳だ。それも踏まえて 、君、ここで雇われる気はないか？」

そう、それが俺達の初めての馴れ合いだつた。失つた過去に興味はなかつた。失つてしまつた以上、親とは他人通しだ。それに進藤司が俺をないがしろにする理由なぞない。結果俺はここに住むことを決めた。それが真相。脳が決めた、いや本能が決めた。最終決定事項。

そして、司さんは嘘をついていた。  
僕の記憶は 戻らない。

「あ

幻想は一気に現実へと昇華する。

……夢じゃなかつた。

僕は、俺で、俺は、僕。

脳が僕を代弁していた。そうか 、 そうだつたのか。司さんと住むことを何ら疑問に思わなかつたのは、そういうことだつたのか。 まさしく僕は、俺は許容していた。本能が、認めていた。だから、僕は 。

「記憶は戻つたのか？」 真弥

見当違ひなことを、楠楓は言つた。いや、でも彼女のお陰で記憶が戻つた。それは脳が動いていた時の記憶。 僕じゃなく、俺が動いてたときの記憶。

「ああ、お蔭で思い出した」

「 そうか！ なら、楠を認めてくれるな！ 私とお前は一緒にいられる、そうだな」

実際に嬉しそうな声ではしゃぐものだから、俺は弱つた。彼女を傷つけることになりそうだたからだ。

「いや 、 記憶は取り戻せなかつたよ。失つたものは一度と戻らない。思い出したのは、俺の行動のみ」

とたん彼女の顔に落胆という文字が見えた。

「嘘だ。真弥、そうだ、思いだすという暗示が足らなかつたのだな。なら、少し辛いが強力な暗示をかけよう。そしたら理解してくれると思うんだ。楠のことも、私のことも。私達、友達だもんな」

「ああ、そうだな。俺たちは友達だ。でも、もう暗示はいらない」

そこまで言い切ると同時に、ガシャン、と音がした。それは外から。そして内側へと音が近づく。予想した。その音の主を。

それは

「世話をかけさせんな。馬鹿弟子め  
間違いなく、進藤 司だつた。

「司さん、僕の記憶はもう戻らないんですね……」

「まず最初に発した言葉がこれだつた。」

「……ああ。お前自身が言つていたことだ。間違いではあるまい」  
そして肯定された。不思議なことに、そこに落胆はなかつた。むしろ、清々しい。

「これからも、司さんのところに、僕はいて良いのでしょうか？」  
「愚問だな。まあ、巻き込まれたのは私なのかも知れないが、一応責任位は取つてやる」

まつたくもつてありがたい話だつた。

「貴方が、司？」

楠さんが呟く。

「ああ、そうだ。私が司だ」

「てっきり男の人かと思っていたが、違つたか」

「名前だけで判断されても困る。司が女の名前でも珍しくもあるま

い

「それも、そうだな……。でも、彼を連れて行かれたら私が困る」

「君はよほど彼に執着しているようだね」

「貴方以上には愛している」

「愛……ねえ。愛の上に成り立つのがこんな監禁なら、僕としてはごめんだった。彼女とは、対等の関係でいたいからだ。同さんはそこら辺はきちんとしていた」

「愛している、か。笑わせる。恋は盲田といったな。まだ若いな。お前は」

「若い……、そうだ。若い。まだ十七歳だ」

「そう、楠さんは答えた。十七? しかしその容姿はどう見たつて中学生のものにしか見えない」

「十七歳にしては小さいな」

「思つたままの事を口にした。別に、他意があつたわけではない。」

「……私の体質がそういう体質なんだ。お前に小さいと言われると傷つく」

「ああ、それはすまない」

「そして素直に謝る。」 まだ僕には余裕があるみたいだ。

「いや、ちょっと待て。そしたら、おかしいじゃないか。公園であつた君の知り合いは? あればどう説明する」

「そう、いつか出会つたツインテールの温和な少女。彼女はビッグ説明をつけるのだろうか。」

「ああ、あれね……。あれは“演出”だ。あくまで中学生だと信じさせるための演出に過ぎない。」 だから困つたのだ。私はあんな子知らないと黙つたのに。 全く楠はいつも勝手なことをする

「……そつか」

「道理で、あの時の彼女の仕草が怪しかつたのか。でも現実の彼女の、おそらくは高校では、彼女はビッグなのだろうか。」 それが少し、気になつた。

「ところで同さん、余裕があるなら出してもらえませんか? 僕、右手の刻印つてやつ消されちゃつたらしくて……」

ふん、と咲さんはため息をついた。

「まあ、急げしらえのものだ。そうなるとは予想していたが、……と、いうかお前も妙なのには好かれたな。まさか楠にお前が監視されてるなんて思いもよらなかつた」

……僕達はさつと出会いすべくして出会つたと思つ。お互いい好いていたし、それは否定できない。まあ、僕も意外だとは思つた。色々なことが意外だつた。魔術師の家系に生まれていたことを考へると、司さんともまたに出会うべくしてであつたと言えよう。

「ところで司さん、僕を助けに来たつてことは国を裏切ることになるけど、良いの?」

「愚問だな……。少々厄介なことにはなつたけれど、君といつ逸材を逃すのは惜しい」

「……素直に好きつて言えればいいのに」

やうこつと咲さんは少し意地の悪い顔をした。

「ああ、そうだな。私はお前のことが好きだ。そうでなければ助けには來ていない」

それは恋愛とか、そんな生ぬるい価値観の好きではなくて、純粋にお互いを好くと言う意味の好きだと、僕は思つた。 僕達は、素直じやない。だから嘘を吐く。それでもたまには、本当のことを言つ。それは大事なことだから。

「ふん、見せつけてくれるじゃないか……。だがな、私も好きなんだよ。真弥が……。だから、真弥が欲しい……。真弥を譲つてくれ……頼む……」

それは稚拙な少女の願い。おそらくの動機。 僕は単純な願い一つでこの身を左右された。 ああ、恋愛騒動なのだろうかこれは。毒物を仕込んだのもまた彼女の愛故、か……。何故だらう、笑える。

「無理だよ、それは……。だつて僕はモノじやないもの」

はつきり僕の口から云えよう。それは無理だと。楠を理解するのは無理だと。彼女を受け入れるのは、無理だと。

「真弥……、私は楠の為に動いているのではない。楠は司の弟子であるお前を狙つた。だが私は司の弟子であるお前に興味があるんじゃない。お前に興味があるんだ……。頼む、理解してくれ」

それは……でもなんとなくわかる。いけないのは、そう、もっと根本的な……。

「楠のやり方は気に食わない。……結局、現状に甘えてるだけじゃないか、楓さんは……」

初めて少女の名前を呼んだ。それは楠と区別をするため。現状に甘えているのはお互い様だった。それを知つてなおこう言つてんだから、僕はするい。

「御託はもういいか？ 私はさつさと真弥を連れ帰つて平凡な暮らしに戻りたいんでね……」

司さんが呟いた。それは紛れもなく本心からの言葉だったのだろう。気がつけば手には炎を纏つている。

「司、あなたと遊ぶ余裕は私はない……。悪いけれど、一瞬で終わらせてもらおう」

一方楓は、司と対をなす水、を形成した。こちらも一瞬の早業だ。……おそらくは、概念上の何かを使いこなしているのだろう。しかし、それを見て僕は落胆した。……これじゃ、勝負にもならない、と。

神宮の方が、よほど強かつたからだ。それはおそらく、楓にも解っていたことだと思う。なのに虚勢を張る様は、見ていて痛々しい。そして、お互いの技が交差した。

交差した瞬間、なんとも形容しがたい音があたりに響いた。水は一瞬で蒸発する。しかし火もまた消える。

司は、走り出していた。……それに身構え、詠唱する楓。だが、遅い。

それは肉体芸。と、いうよりは不良キック。司さんは勢いを殺すかの如く彼女の目の前で止まる。余韻を残さないまま、彼女を思い切り蹴飛ばした。

魔術師なのに。

「」の馬鹿者が。魔術の詠唱は古来より伝わる言葉の業。威力は高いが、その分隙だらけになる。魔術師は肉体も磨いてこそ魔術師。お前のような軟弱者に私は負けない」

完璧に、司さんが上手だつた。否、彼女が格下過ぎた。耳を澄ませば、趣味の悪いことに彼女の嗚咽が聞こえた。

「…………うつ…………うつ…………。私は、ただ真弥と一緒にいたかつただけなのに…………」

「楓さんは楠を嫌いながらも、楠を利用した。その代償が、この有様なんだ……」

僕は呟いた。それは誰に言う訳でもなく……自分に言う訳でもなく、唯現状を示す言葉だと思った。

司さんはと言つと、新たに魔術を詠唱し、鉄格子を破ろうとしていた。

僕はそれに身構え出来るだけ鉄格子から離れる。

楠 楓は妨害する気力もないのか、何かが抜け落ちた顔で、こちらを見ているだけ。

世界が一瞬ぐにやりと曲がる。その違和感を鉄格子だけに残しながら、世界のゆがみは消え去つた。 とどのつまり、鉄格子だけが、曲つた。大きな隙間が出来る。そこから僕は抜け出した。

「行くぞ 真弥」

司さんは大して思い入れもないようで、さつさとこの場所を離れてしまう。僕はと言えば、逆に名残惜しさを感じていた。この場所にではなく、彼女に。

「楓さん、もし、僕達のことを思うなら、司さんの事はほおつておいて欲しいんだ。あの人は国を裏切る危険な人物にはならないよ」

全く、都合の良い言い分だと、自分でも白々しいほど思つた。

現実は甘くない。現状は常に変わる。　　変わらないのは甘えか？　変わることこそが甘えか？　まあそのどちらにせよ、僕の話は結局逃げることでしか成り立たないものになってしまった。何故僕はide aを手に入れたのか、それは解らない。　　何故僕なんかが、そんなものを手に入れてしまったのか。きっかけは、何もない。現実は甘くない。現状は常に変わり続ける。

ただし、これは急激に変わりすぎた話。

あの後のことだが、結局楠は、いや、管理者は僕達を国に売り払うようなことは止めてくれた。恐らく、楓さんがなんとかしてくれたのだろう。イエスをイエスと言う権利。ノーをノーと言う権利で。それでも安心しきれなかつた僕らは、一般の世界から一度姿を消した。

期間で言うと、およそ三ヶ月程度。その間はキヤニスと

司さんと僕とで放浪の旅、もとい、観光旅行を楽しんでいた。

時にはラブホテルに泊まつたりもしたが、僕が危惧するような事態にはならなかつたし、なれなかつた。単純に休むことを目的としたホテル通いだつた。

司さんの傷は急ごしらえの治療だつたらしく、実際は結構な大事だつたそうだが、本人はそれを表情に出したりしないので、僕は迂闊なことに司さんのお腹に軽く拳を当ててしまい、とんでもない目にあつたりしたのだが、それは置いといて。

そんな期間を過ごしたあと、僕達は安全だと保障された。そして、円形の魔術師邸にて。

「君がide aを手に入れた理由だが

「はあ、それはまた急な話ですねえ」

「急でもないだろうに。自分のことだ。もう少し関心を持つたらどうだね」

呆れた声で司さんが言つた。もつとも、正論なのだから仕方ないが。

「君は、概念としてideaをすでに持っていた可能性がある。つまり、起源としてideaに最も近い属性を備えていたと考えることができる。ただそれが矛盾を引き起こし、概念と概念のぶつかり合いによりそれまで相殺されていたと思われる。そして来るべき時に引き金としてideaが発動するときがあらかじめ決められていた、と推測される。そう、脳の成長に伴い、君はすでにideaと言つトリガーを引いていたのだ」

司さんの話はいつも小難しい。

「えーっと、要訳すると、僕は元からideaという素質を持っていた。でも子供の頃の脳の大きさじゃ足りなかつたから具現化することではなく、大人になつてから発動した、と？」

概念は具現化するものではないが、大筋は合つてゐる、と彼女は言つた。

「そしてideaの覚醒は同時に脳を一段階上のレベルに持つてさせた。それが原因で誕生したのが、脳の人格だ」

「つまり、僕じやなくて、俺のこと？」

「そういうこと」

そこまで言つと、司さんは言葉を切つた。

「お前がその力をどのように使うのかは自由だ。あらゆる概念を見る眼だ。医者になれば悪病の原因が一目でわかるだろう。鑑定氏になれば、モノの価値観をひと眼で見破れるだろう。魔術師になれば、あらゆる手段を熟知することになるだろう。そのどちらもが、君次第だ」

最後に司さんは、そう言つた。でも僕はそのどれもに興味がなかつた。

「結局僕にそんな能力はなかつたんですよ」

自分に言い聞かせるように、僕は言つた。司さんは、そうか、と相槌を打つ。

「当面は、司さんの雑用係が良いところですね」

「それを真弥が望むならば、私は責任を取ろう」

そしてお互い笑いあつ。

「 おはよっ」

別にそれが唐突だつた訳じやない。ただ僕は普通に挨拶しただけだ。

「お、おはよう」

そう返事をしたのはショートカットの女。始まりの教室で、初めてあつた人間。そう、彼女だ。

ここは学校。 あの後、司さんに頼みこんで転校を取り消してもらつた。 幾ら司さんの世話係だつたとしても、何もせずにごくつぶしの生活をするのは気が引けたからだ。そして現状。どうしたかといふと、僕の存在は突然の転入生ということになつていた。皆の記憶から僕は存在しないことになつた。 記憶は一度僕に関してリセットされたということだ。これも司さんの仕業。いや、彼女のお陰。記憶が戻らない今、また仲良くやり直すというのは、苦痛だつたからだ。ならばいつそのこと、全て最初からなら、そう思つて司さんに僕が頼んだのだ。

と、言つことで今の僕は転入生。

でも実際はあまりなじめずに学校に通つていた。そうそう転入生が優遇されるつてことは、少ないので。別に授業をさぼつたりする訳ではないが、居辛い。それに今更学校を止めるとは言いだせないし。

僕は結局何がしたかったのだろうか。たまにそう思つこともある。

つまらない授業を受け、ろくに会話にも混じれず、中途半端に生きていた。

まあ、それでも成績は良かつた。不思議と暗記力が滅法強くなつていたから、対外の授業は楽だつた。これもideaの影響であろうか。

ある日の午後。

「ねえ、真弥君」

唐突にそんな声が聞こえた。

「和彦？」

「うん、そう。覚えていてくれたんだね。つで、よく考えたらいきなり名前で呼ぶのって、失礼かな？」

それはいつぞやの会話とは全く真逆のもの。

「いや、そんなことないよ。僕も呼び捨てにしてるし

「ああ、そうだね。へへ」

彼は笑った。少し恥ずかしそうにはにかむ様は、見ていてこっちも恥ずかしくなるけど……悪いものでもなかつた。

僕達はそれから友達になった。思えば彼だけが、最後まで僕のことで悩んでくれた人だつた。それは彼なりの友情だつたのだろう。

そして僕達の友情つてやつは、記憶とか関係なしに、続くのだ。  
それが少し誇らしい。

ある日の午後 2。

屋上でねつ転がり、空を眺める。雲は自由気ままに流れ、  
その自然な様を風に任せるだけ。思えばいままでの、否、今の僕も  
そんな様な感じかもしない。

学校 、その中でも特に屋上は女らぎの場所だつた。

「こんな所で会うとは、奇遇だね

「え？」

唐突にかけられた声。それに驚いた僕。声の主に視線を向け、又  
更に驚いた。

「……驚いたな

「まあ、それも仕方ないさ」

屋上に、一人だけの声が響く。ある意味、それはとても過激や  
すい空間だったし、僕はその声の主が好きだったから。その声の主  
とは、楠 楓。まさか、同じ学校に通っているとは思わなかつた。  
そういうえばこの学校、校長の名前が楠だつたつ。まあそれを知つ  
たのも最近の出来事。案外楠も、印象に残らない。理由と言えば、  
楠との直接のやりあひつてやつは、なかつたからだ。まあ楓  
さんはほつといて。

「そういうえば、君が抱えている問題つて何なの？ 学校で抱えてる  
問題つてやつ」

「……この体格だからな。単純に言つていじめだよ」

「いじめ？」 でもそんなの君だつたら、その……言い方悪い  
けど、復讐つてやつもお手のものだつたんじやないの？」

「……ふん。そんな邪道な手段をとるほど私は子供じやないわ。…

……いつか……、君の前でだけ正直に話せるときが来れば良いと思つ  
てた。でもそれつて、単純に、簡単なことだつたのね」

「……口調、そっちの方が可愛いよ」

「ふふ。そうかな？ ジャあそつといふ喋り方にしてみるかな？ 君  
の前でだけ、ね」

「で、そのいじめだけど、その後の具合はどうだつだい？」

「ああ、仲良くなつてみたんだ。自分に。そし  
たら、意外と和解出来たんだ。それも君のお陰。 君尽くしだ  
な」

そう言つて、彼女は笑つた。僕も、笑つた。 さわやかな風  
が吹く。覗き込むようにして僕を見る彼女も、気がつけば僕の横に  
寝転がつてゐる。少し、ドキドキする。 それはそんな彼女の  
雰囲気が、年相応だつたからだ。

「ねえ、……こんなこと聞くのもなんなんだけじせ  
遠慮がちに僕は言つ。

「ん？ 何？」

彼女は眼を瞑りながらそう答えた。

「僕の何所が好きなの？」

「ぱつ、 そんなこと急に聞くな！」

顔を真つ赤にして、本当に発火したかの如く真赤にして慌てる彼女。その様は、何故か微笑ましかつた。むー、とした顔をこっちにむけて、しばしば沈黙が流れる。

「……きつかけは、単純だつたんだ」

彼女は、ゆつくりと語りだした。

「出会い頭が私達の絶対ではない。私はお前の事を監視していたからな。そう、司に拾われた日からだ。何故楠は監視に私を選んだのだろうか……。それは油断するから? いや、ロマンティックな言い方をすれば、私は運命だと信じたい」

「詩人みたいな事言うなよ。僕まで恥ずかしくなる……」

その証拠に僕の体温はぽかぽかと上昇していった。

「まあ聞いてくれ。いや、やはり聞き流してくれ。……私としては、唯見ているだけだった。そうだな……、初めてまじまじと見たのは、キヤニスの散歩をしていた時かな。確か私達が出会う六日前程。その時に私はすでに君を知っていた。その頃から君はまあ、興味深い人間だつたよ」

「……褒めてないよな」

「ああ、そうだ。褒めてない。唯、酷く惹かれたよ。

犬と無

邪気に遊ぶ人間なんて 、大人じや初めて見たよ

「別にいいだろ?」

「ああ、お前はそれで良い」

「……さつきからなんか肯定されてばつかだ」

「そうだな」

そういつて、また彼女は一つ、頷いた。

「君はそういう人間だつたから、初めて話しかけた時は緊張した。

私みたいな強かな女が話しかけて良いものかと」

「自分で強かと言つた。確かに楓さんは強かかもしれないけど。そ

れにその言い方だとまるで僕が弱そうじゃないか」「

「そうだ。お前は無知だつたし、それに純粹過ぎて、壊れそうだつた。それを思うと中々触れることなど、出来ないさ」

……中々、氣恥しかつた。僕はそんなに純粹じやないと自分では思つからだ。　　だつて、むしろ僕は、うん、下心だつてある。　　こうして喋つているのだつて、誰かに甘えたいつていうその線上の答えなのかもしれないし。

「え？」  
「あ、お前は私に甘えてもいいと言ってくれたな」

「ああ、いや、直接ではないさ。遠まわしにそう言つてくれた。言いたいなら言つてもいいけど、無理には聞かないよつて。あれはつまりそういうことだらう？ お前なら、もし私が言つたとすれば、全力で悩んでくれただろ？ つまりはそういうことだ」

「そんな……他意はなかつたんだけどな、悪いけど」

「お前はそりがちかもしれないが、私にとつてあの一言は大きかった」  
そんなこと言われても、僕は唯々、彼女の中の僕の大きさに戸惑  
うばかりで……。

言われたとおり、黙りこくる。その方が、赤面した僕の気持ちを隠せるからだと思ったからだ。　　僕は、緊張して多分今喋れば声が裏返るかもしれない。じゃあ、黙つていよう。ん。楓さんには悪いかれど……それは悪く思はねば、決してない。

「楓さん。僕達友達でいいんだよね」

「……それはこっちのセリフじゃないのか？ 私はお前に嫌われたのか、すごい心配だった。 なんせ、毒針まで刺したしな」「確かにひどい目にあつたけど、 、 」 こうして無事なんだし、

ପ୍ରକାଶକ ପରିବାର

「……なあ、償いつてやつをしていいか？」

「償い？」

「ああ、そうだ。償いだ」

「償いつて、何？」

「こうこうことだ」

そういうと、僕の視界は楓さんでいっぱいになつた。 空の代わりに彼女の目が視界をうめる。 僕達は眼を開けていた。やがて青空に移り変わる。それは軽い接吻、もとい、償いだつた。

「なつ」

「キスの時くらい、目を瞑れ」

「楓さんだつて、開けてたじやないか……」

「お互いまだ。チャラだチャラ

「償い、ねえ……」

「乙女のキスだ。高いぞ」

「まあ、そういうことにしどくか

「そういうことにしてくれ」

「気恥ずかしくて、顔を向けることが出来ない。 勘弁してくれ、こうこうの、苦手なんだ。誰に言つててもなく、僕は心の中でつぶやいた。

「僕達は 頭までバクッてきてる。

「僕達は うん、少なくとも、悪い仲じゃない。良い仲だ。それは、誇つて良いと思うんだ」

しばらくの沈黙の後、彼女はやがてこう言つた。

「 上手い言い方をする。でもまあ、そう、だな」

それからお互い、微笑しながらゆつたりとした時間を過ごした。それは気恥ずかしかつたけど、決して悪いものではなかつた。

もう一人の自分の物語。

やがて眼が覚めた最初の夜

。辺りは昏々としていて、否、

自分が昏々としているからだろうか、夢と眞づ名の混沌が現実と入り混じり、そこは不思議な幻想世界を作り出していた。または、それこそが眞実なのか……。

夢現……という訳ではなさそうだ。自分としてはこの上無いほど視界がはつきりとしている。しかしそこに意識は無い。つまりは、俺の時間だった。

#### notopic

俺の、俺による、俺のための、時間帯。それを俺はnotopic（論題にならない）と名付けた。Not topic。まあ、安易かな、とは思った。それでも、俺はこのnotopicでしか行動出来ないのだから情けない。

舞台は夜。 静かな夜。俺は何をするでもなく、唯散歩に出かけた。それは、意味無き散策。 新しさなど求めてもいい。

「おや、珍しい客人だ」

「客人…………？」一応お前は保護者だから、家族だろう？」

「ふ、そうだったな」

「どこがおかしいのか、理解に苦しむが、彼女は笑っていた。

「思えば、こうして対面する機会はあまりなかつたな」

「ああ、表だって活動することはないからな」

俺が表だって行動するようになれば それは、いけない。いや、俺が行動することに変わりはないのだから良いのかもしけないが、俺は眞弥であつて眞弥にあらず。彼の時間を邪魔する訳にはいかない。 だから、待つ。Notopicを。

「恋しいか？ 自分の時間が」

「おかしなことを聞く。俺は眞弥に違いないといつのに……」

「それもそうだな。と魔術師は一人納得をする。 ？」俺は納得していないというのか。いや、そうなのかもしれないな。

「何故俺は生まれたのだろうか」

」

「それこそおかしなことだ。人は生まれ出たときから多種多様な人格を孕んでいる。そのうちのどれが主体になるかは解らないが、それは確実に内包されているのだ。君は偶然仮とは言え所有権を得てしまった。それだけだ」

「それだけ……ねえ。一瞬、思考が途切れる。脳である俺がいうんだから、それは紛れもない停止であつた。

「どうした？」

司が言った。

「あ、いや……」

俺はしどろもどろに答えるばかり。

「所有権を得た、といつたが、偶然脳だつたのか？ それとも、必然だつたのだろうか……」

「私は後者だと思う。Ideaが与えた影響は多大だ。それが脳に関わってきたのだろう。Ideaとは概念を見る眼ではない。確かに一考するとideaとはそうなのだが、肝心なのはそれを租借し理解する脳味噌が必要なのだ。つまり、君は選ばれたのだよ。 または、真弥には自己を優れさせたいという無意識下の願望があつたのではないか？ それが結果で君という願望が産まれたのかもしれないな」

「俺が……願望？」

「ああ、まあ、あくまで仮説だがな。君の存在はあまりに希薄であるからな」

「希薄……か。そういえば、真弥は俺になつてゐる間の記憶があまりないよつだ。俺は脳だから真弥の記憶を引き出すのは容易だが……。どうやらこれもideaの影響らしい。Ideaを使うとどうやら記憶の一部に欠落が出るらしい。それが真弥の記憶だ。脳みそは真弥と俺と、両方の視点で記憶する。その片方が潰れる。それだけの話だ。だから真弥は俺を認識することが出来ないんだ」

やがて眼が覚めた最初の夜。辺りは昏々としていて、否、自分が昏々としているからだろうか、夢と言つ名の混沌が現実と入り混じり、そこは不思議な幻想世界を作り出していた。または、それこそが真実なのか……。

夢現……という訳ではなさそうだ。自分としてはこの上無いほど視界がはつきりとしている。しかしそこに意識は無い。こういう状態のときは決まって金縛りになるものだったが、そうではないようだ。第一、金縛りの時に見える田の裏側から見える血の塊、もやもやがないし。

ああ、まあそんなことは兎角どうでも良いか。

取りあえず、喉が渴いていた。自分は飲み物を求めて体を起こそうとする。が、動かない。右手、左手 不可。上半身、下半身、大まかな部位も動こうともしない。指先を動かそうと試みる。そうしたら、人差し指がぴくりと立ち上がり、続いて別の部位も動くようになった。上半身を再度動かそうと試みて、そこで自分は気がついた。

ここはどこだ？

見知らぬ天井、見知らぬ雰囲気、匂い、それらは夜が見せる瞬きの間の幻想。よくよく考えてみたなら、思い当たる場所であった。むしろ気がつかないのは可笑しかった。おかしくておかしくて笑える。なんだここは学校じゃないか。自分は自分のクラスの教室に横たわり、冷たくて固い床の上で体をガチガチに固ませていた。

そこまで認識出来る程度に回復すると、今度は意識が完璧に覚醒した。

「何で僕はここに居るんだろう……」

……思い出せない。何か大事なことを忘れているような気がする。

そこまで考えて絶望した。

自分は、誰なのだろうか

？

名前。

生まれ。

出身。

住所。

家族構成。それら全てが曖昧で、霧がかっていて、ああ、うん、つまり、だ……。記憶喪失ってやつだろう。

なのに、自覚できる自分の学校。

……右手の甲を額に乗せる。そして溜息を一つ。

「まあ、良いか。警察に行けば何かわかるかもしないし……」

どうやら思ったより自分は大丈夫そうだった。

学校から出てすぐのことだった。

弱った。地理が全く解らない。自分の脳内で確認出来たのは、自分の学校のみ、だった。つまり、だ。僕の拠点となるのは学校であり、情報を集めるには学校を拠点にするしかなかつたのだ。

場合によつては、学校で寝泊まりするのもありだな、とそう思い始めた自分がいた。そんなこんなで迷つている自分が居るのはどこかの路地。夜つて所為もあって、全く視界が利かないのが残念な結果をさらに呼び寄せている。学校を飛び出してから約三十分経つてゐると思つ。学校で確認した時刻が確か深夜二時位。学生としてはあまりよろしくない時刻に歩いていることになる。いつそ補導されたなら良いのに、世の中はいつも上手くいかない。

そして、たつた三十分で僕は嫌気がさし、探索するのをやめにすることにした。第一、こんな状態になる理由が解らないし、一体何がどうなつてゐるのやら、さっぱり理解が追いついていなかつた。

「朝になれば、誰かしらに会えるだろうし、多少の騒ぎにはなるだらうけれど、まあそれ以外ないよな。それに、朝の方が周りも見やすいだろうし……」

あまり苦労しない疑問だつた。自分を分析すると、結構突拍子もない感性の持ち主であり、多少の事はどうじない、またはどうじられない性格の持ち主であるといつことだけ痛感した。

そして、結局その日は、学校に泊まることにしたのだ。

。

俺の記憶だ。

じつとしていたら、陽は傾きはじめ、僕はそれを眼で追いながらカウントをしていた。そして数え始めておよそ一万五千あたりを過ぎたころ、夜へと、闇を徐々に落としながらあたりは変貌していくのだった。

不思議と、そこになんの感情も抱くことなく、僕の精神は安定していた。だからだろうか。今僕は、無感動だった。

夢と現実が入り乱れる、妙な錯覚に陥った。あたりの彩色は異様の一言に変わり、視野という視野に、気持ちの悪いものが見え始めた。それはまるで、情報のように僕の脳を刺激した。

気持ち悪いものが、頭を支配する。白黒、反転する。それに担うように、夜は深みを増し、全体をブルーで染め上げる。地面から何かが浮き上がる。それは文字にも見えたし、あるいは根本的な何かの様な錯覚もする。その時唐突に理解した。これら全ては、方程式なのだと。

「人が　　いる」

俺の記憶だ。

体が徐々に覚醒へと近づく。それと共に脳が目覚める。否、それは完璧な目覚めだった。脳の容量の半分以下しか使っていないという人間の領分を遙かに超えている。それはほほポテンシャルの全てを使っているという状態だ。それは快感だった。高速道路を三百キロくらいで走っている感じ。世界が情報に満たされてゆく。水のように途方もない情報の源を片つ端から脳みそは認識しようとする。「コップから水が溢れるみたいで、なんだかそれは凄く勿体ない事をしているような……、ひどく、後悔した。

「目が覚めているのか……？」

唐突にそんな声が聞こえた。

「ああ、どうやらそううらしい」

口が勝手に走る。僕の意識レベルで出来る状況じゃない。いや、僕じゃない。総合して僕と言つ自我があるだけで、僕という部品は沢山ある。僕は、総合的な僕はそんな部品の代表者でしかない。つまり、今喋っているのは僕であり、僕にあらず。そこまで考えて、意識は吹き飛んだ。

「君は……真弥なのか？」

あの妖艶とした女が喋りかけてくる。口調がずいぶん違うが、恐らくはそれが本来の彼女なのだろう。

「どうかな……。君こそ何者だい？ そう言えば名前すら知らないそう俺が尋ねると、彼女は一寸戸惑い、やがてそれを忘れるが如く、こう答えた。

「私の名前は進藤 つかさ 司。魔術師だ」

それが出会い。俺と司の最初のコンタクト。

情報が世界を満たす。いつかの如く幻想は昇華する。

気持ち悪いものが、頭を支配する。白黒、反転する。それに拘うよう、夜は深みを増し、全体をブルーで染め上げる。地面から何かが浮き上がる。それは文字にも見えたし、あるいは根本的な何かの様な錯覚もする。その時唐突に理解した。

これら全ては、方程式なのだと。

がしり、と蹴りを受け止めた。火事場の馬鹿力つてやつだ。それは脳をフルに活用することによってなせる現象。

「いい加減、痛いぜ……」

初めてのidea行使。今までも、その予兆はあったが、これが初めて。

「ああ」

徐々に露わになるその姿。……それはベンチの後からだつた。それを確認したと同時に、俺は前を向きなおした。……単に首が疲れだからだ。

「こんな時間に出歩くのは感心出来ないな」

「……そのくらい許せ」

「まあ、俺がいるうちは安心か……」

「へえ。お前つて頼れる人間なのか?」

「人並みにはな」

「残念だが……却下だ」

ふつり、と何かが首筋に刺さつた。反射的に動こうと思つたが、その反射運動が全く効かなかつた。

「何を……?」

「神経が麻痺する毒だよ」

冷静な口調で物凄いことを言つた。

「ど……く……?」

声まで出なくなつてきた。それを確認すると、彼女はおそらく持つてゐるであろう注射器を抜いた。じつこいつことなのか……さつぱり理解できない。

「良いことを教えてやろつ。楠はな、管理者だ。管理者とは、国が魔術師を管理する際、宛がう役職の事だ」

そこまで聞いて、俺の意識は 落ちた。

目が覚めたのは暗い牢獄のような場所で、ゲームとかにありがちなランプが俺の閉じ込められている一室に置いてあるだけだつた。ランプの色はオレンジに近く、周囲もオレンジを中心にして照らされていた。俺はそんな部屋の中心でクッショーンの上に座つていた。……はつきりいって居心地の悪い空間だつた。そんな空間でまず俺がしたことと言えば、完璧に幽閉されているかどうかの確認だつた。

薬物のせいでピリピリとする体を動かして、一か所一か所出口が

ないかを確認する。……、結果はノー。全くと言つていいほど出口がない。入口すらない。嵌められた鉄格子に隙間はほとんどなく、向こうに人がいるのか認知するには多少不便だつた。

「一体どうやって閉じ込めたんだ……」

そう思い、上を見ると、天井にとてつもなく大きな穴が広げられているのに気がついた。きっと上から放り込んで、クッショングの上に落としたのだろう。……上ることには無理そうだつた。

「あのがきが……」

「誰がガキだつて？」

唐突に声。それは俺を幽閉した張本人、楠 楓の姿だつた。

「早速だが、どうして俺を閉じ込める。俺は何かやつたか？」

「お前は司という魔術師の弟子になつてしまつたようだね。その所為さ。司は不穏分子だ。その司が弟子をとるなどろくなことが起らぬ。そんなこと楠では見逃せなかつたのさ」

「お前、楠の家に随分順応してないか？ 俺の知つている楓はそんなことはしない」

「それとこれとは別件だ。代々楠は魔術師の管理をしてきた。それに私は異論はない。……唯、真弥が弟子になつてしまつたことがショックでたまらない。いや、知つていたんだ。最初から」

「つまり、最初の出会いは偶然じやなかつたということか。……三者面談とか、学校にいにくいとか、そういうことじやなくて、ただ単に俺を見張つてただけだつたのか！」

「……すべて嘘と言う訳ではないが、……ああ、そうだな。ずっと前から知つていた。君が記憶喪失になつて彼女に拾われたあの夜から私はお前を見ていた」

「そりや随分前からだな」

「ああ、そうさ。会う度良心が傷ついたよ。君は、好きだつた」

「司はどうしている」

「彼女は当面は放置だ。弟子を預かつておるという手紙は出したが、同時に弟子に手を出すと國から狙われることになると脅しておいた

からたぶんこないだらう。これで君は、私と一緒にだ　　」

「なるほど。確かに司なら来そうにもないな。なら自力で脱出する」概念上の右手を取り出そうとする。その直後、俺は落胆をした。

「……？ 右手が……ない？」

「悪いが、その右手はこっちで中和させてもらつたよ。君の右手は普通の魔術師がつけているものとは違つて、刻印と言ひ名の寄生虫を宿らせることによつて出来る疑似的な右手だつたのを。つまりは、偽物つてこと」

……なるほど。確かにあの儀式はあつさりしそぎていた。違和感があつたのは、気が付いていたが。しかし、だ。

「都合が良くなきか？」まるでこっちのことなぞ全てお見通しつて感じじやないか。それに、何故右手を中和出来た？ それじや魔術師みたいじやないか

そういうと、彼女はくすりと笑つた。

「勘違いしているな　　。国が管理しているからつて、管理者が魔術師でないと限らないだらう？ 確かに私達みたいのは少数派だがな」

合点がいった。

高確率で俺は逃げられない。

「こっちのことをお見通し？ ああ、それは神様の皮肉つてやつだよ。言つただろ？ 君は最初から監視下にあつたと。その理由は單に司の弟子という理由ではない。君は、三木谷は楠の分家なのだよ」

……なんだつて？ 楠の分家？

「君には魔術の素養があつたのだよ。三木谷は優秀な魔術師の家系だつたからな。だから記憶喪失の時には真つ先に楠に連絡があつた魔術師の家系　　。それは驚きではあつたが、自分にとつて何故か当然の様な気がしてた。本能が、理解する。

「……理解した。だが司さんは家を訪問したらしい。その時になにもなかつたとは思えないが」

「司は三木谷の名前を知つてた。何故なら魔術師とは少数派の人

間で、少数派を覚えるのは簡単だつたからだ。君を引き取ろうとした理由は解らないが、彼女が三木谷の家を訪ねたときにもなかつたとは思えないな。にも関わらず、三木谷はそれを許容した。解せないな」

俺にはそれが、すぐに検討がついた。  
いつかの記憶を掘り起こす。

ああ、そうだ。君の親御さんとも話はつけたよ。学校にも。この書類はそういうことに対する証明書のようなものだ  
親は……居たのか？

あまりにまぬけな質問。でも、泣きそうになる。俺に親がいたと知つたと同時に、決別。……脳がついていかない。親との決別……、国が魔術師を許容していく、良いように扱つていて。そして、僕が

司さんの、弟子　？

ああ、いた。ちなみに君は一人暮らしだったよ。色々ごたはあつたが、そこは語りたくないね

暗示とは、内側に秘めている優先順位というものを引き出す手段の一つだ。人間は願望に満ちている。たとえば、お金持ちになりたい、死にたい、等。後者は自殺願望と言つた。その一つにこの家に住みたい。働きたい。元の家から家出したい、等があるとしよう。暗示と言うのはそれらの願望をより強くしただけに過ぎないのだよ。君は例え暗示にかかっていたとしても、自分の意志でここに居るのに違いないのだよ。ちなみに、自分の意志を全く無視した選択をさせることを、洗脳と言つ

つまり司さんは、両親に洗脳を使つたと予測できる。「たごたとはそのさいあつた争いか何かのことだろ。　全く乱暴な人だ。そう、俺は思った。

「三木谷は記憶に関して優れていた魔術師だった。君の記憶に障害

が起こつたのも魔術が関係してゐるおそれがある。ただまあ、こちらにむりやり引きずり込もうとしたのが悪かつたのか、神宮を仕向けてるのは色々な意味で失敗だつた。それに彼が死ぬことになるとは、思わなかつたし

「情報が早いな」

「ここいら一体を牛耳つてゐるのが楠だ。皆それぞれ、街の住人は魔術師通しの争いを許容するという暗示にかかつてゐる」

誇る訳ではないがな、と彼女は次いで言つた。

そこで会話は途切れた。……聞くこともなくなつたからだ。

さて、俺は一体どうすればいいんだ？」

「……記憶を取り戻したいのならば、楠の力で取り戻させてあげる「へえ……そんなことが出来るんだ」

「やつてあげましょうか？」

「御免だね。俺は今を氣に入つてゐるんだ。いらない過去なんて邪魔になるだけじゃないか」

「もう、遅い」

そう彼女が呟くと同時に、頭痛に見舞われた。

「何をする……」

「あなたの最下層の記憶を取り戻させてあげる」

そう、何の感情もこもつてない声で彼女はそう言つた。全

く、魔術師というやつは、そうじてこういう人間なんだから。本日何度もより強烈な頭痛と共に陥

つた。

俺の記憶はここまでだつた。そう、俺としての活動記録はここまでだ。後は全部真弥の記憶。何とも、おいしい所は持つてかれつぱなしだつた。俺は痛い目を受けた時にばかり浮き上がる。だから頑張る。脳のリミッターを外してでも。それが体の負荷値を上回つても、俺は生きるために、頑張る。

生きる

?

「そりゃ……俺は生きたかったのか。俺は、唯存在しただけではなくて、俺として生きたかった」

「どうやく気がついた、一つの真実。それは あまりに愚鈍で、どうしようもない奴の願いだけれど……。」

「俺みたいな……存在価値がないやつが、願望だなんてな」「それは違うぞ、三木谷 真弥（脳の真弥）。生まれてきたからには、それ相応の義務というのが世界によつて定められる。まあ確かにお前の場合は存在意義が曖昧だ。一個体に必要な人格は一つ。だからお前は希薄になりがちだが、決してその存在は真弥にとって無駄なものではない」

魔術師は捲くし立てるようにいう。それが……あまりに意外で、俺は、少しだけ泣いた。でもそれはおそらくばれていらないだろう。きつと真弥が悲しみを少し受け持つてくれたから。

「は、魔術師風情がよくいったものだ」

「強がるなバ力者が。お前は馬鹿者ではなくバ力者だな。世界の真理を紐解くのも、魔術師の命題の一つだ。科学者と魔術師は似て非なるもの。生命の神秘で言い争つつもりはないが、こちらにもそういった説教紛いのことくらい言える知識はあるぞ」

そういつた彼女の瞳には、優しさが込められていた。 全く

この人はいつもこういつた場面でツボを押さえる仕草をする。

これから、俺がどういつた立場で、どう振舞うのかは解らない。

　　真実  
　　実態  
　　真理

　　その全てが実態を明らかにしない中、俺だけは知っていた。俺だけが知っている世界。世界そのもの。 それは俺を宿したことにより、真弥が避けた罪と罰の実態。

　　俺はこんな世界をこれからも生き抜くだろう。  
　　限られた時間の中で。Notopicの中で。

でもそれは決して悪いものではないと、信じることが出来る。自分がどんなにみじめな存在なのか、僕ははっきりと理解した。世界がどんなにみじめな存在なのか、僕ははっきりと理解した。それで御相子、それでチャラだ。

俺はこの先どうなるのか、そして過去になにがあつたのか、何も知るすべがない。あるのは今だけ。でも、今という瞬間が楽しいから

、もう少しだけ、彼女と一緒にいよう。

その際あつた色々な事件は俺の中に焼き付いて離れないものがあるかもしれない。過去に関することも、あるかもしれない。唯それはまた別の話。

Notopic 終わり

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5434e/>

---

notopic

2010年10月8日15時17分発行